第７回（平成 27 年度）

共に学ぶ市民の集い

記録集

平成２７年

１１月２８日（土）　小櫃公民館

主催：共に学ぶ市民の集い実行委員会(市民・君津市公民館連絡会)

協力：体育協会小櫃支部・ｽﾎﾟｰﾂ･ﾚｸﾘｴｰｼｮﾝ推進員小櫃支部・スポーツ推進員小櫃地区

目　次

実行委員長あいさつ		… ２
実施要項		… ３
募集チラシ		… ４
おしゃべりウォーク		… ６
発表記録	小櫃公民館の取り組み	… １４
	かやぶき屋根の葺き替え	… １９
	家庭教育学級からサークルへ	… ２２
分科会・全体交流会		… ２５
参加者の声【アンケート集計結果】		… ３１
全体総括～公民館の「つなぐ」力～		… ３４
あとがき―実行委員の想い―		… ３６
資料「共に学ぶ市民の集い」について		… ４２

当日の実施内容＆ＭＡＰ

9：00～ **おしゃべりウォーク**
（右図参照）

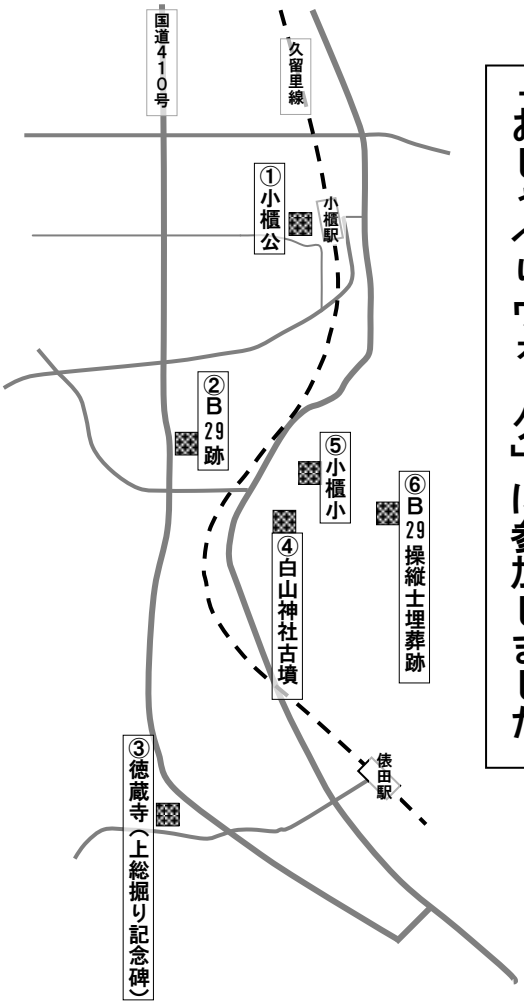
12：00　昼食・休憩

12：50　開会行事

13：00～
公民館や地域活動の報告
①小櫃公民館の取り組み
②かやぶき屋根の葺き替え
③家庭教育学級からサークルへ

14：05　休憩・部屋移動

14：15　**分科会**（３会場にわかれて）
15：05　**意見交換会**
15：25　**閉会行事・解散**



午前中は、小櫃地区で毎年開催されている「おしゃべりウォーク」に参加しました。

記録集発行にあたって

第７回　共に学ぶ市民の集い
実行委員長　　渡邊　護

今年度の「共に学ぶ市民の集い」は、「語ろう！知ろう！公民館のつなぐ力」をテーマに、晩秋の小櫃を会場に開催されました。午前中は小櫃公民館の地域とのつながりの実際を、小櫃で行われている「おしゃべりウォーク」に参加する中で直接体験し、青空の下で快い汗を流す語らいから始まりました。

今回の集い実施に当たって、市民代表と市内８公民館の職員からなる実行委員会を７回、更に、総務・企画・広報、３つの委員会による協議・検討をそれぞれ重ね、当日を迎えました。

実行委員会では年度当初、会の在り方を、「共に学ぶ市民の集い」開催に至った原点の心に立ち返り、地域づくりの中核としての公民館の在り方を協議の中心に据え、実行委員会を極力研修の場とすることが期待されました。会を重ねる中で、公民館の役割・機能や課題等の実践報告を交わす中から、公民館機能の中でも、「つなぐ力」に焦点を絞り込み、人・団体・地域の「つなぐ」実践を各館から報告し合い、協議の柱としました。

以上の経緯の中から、今回発表戴いた周南・中央・小櫃公民館の実践はいわば「つなぐ力」協議の代表発表であったと言えます。それぞれの内容につきましては記録集をご覧いただきたいと思います。

「共に学ぶ市民の集い」は平成２１年度に生まれています。当時の状況を直接知らない私ですが、発足の熱き心が、集いの「ねらい」に見事に集約されています。より良い公民館を求める市内８公民館が、お互いの成果を共有し合い、市民の力を巻込んで更なる理想を追求する、正に攻めの姿勢です。

「教育は人なり」という格言があります。社会教育にせよ学校教育にせよ真理を射て実なる言葉です。日本独自の社会教育施設である〝公民館〟は、それぞれの地域の中で、過去・現在・未来にわたって実に大きな期待を担っています。しかしながら現状における課題の多いことも事実。特に職員の置かれる処遇を直視する中では、今回のテーマであった「つなぐ力」が極めて重要であると思います。少ない職員での企画・運営を担う現実、そのピンチをチャンスに転じる力量の中核を担う資質だと思うのです。そして、大事に育てたい学びの場が、期待の中で誕生したであろう「共に学ぶ市民の集い」にあると、私は思います。

今年度の集いに至る過程で、集い開催の中から、そしてこの記録集が、それぞれの公民館の機能を高めるエキスとならんことを祈ります。

第７回『共に学ぶ市民の集い』実施概要

―あなたの学びが豊かなまちをつくる出発点―

１．「共に学ぶ市民の集い」とは…（主旨）

人と人とが学び合い、育ちあう関係づくりの中で共に手を携え、豊かな暮らしと地域をつくることがますます大切になってきています。そこで、市内の社会教育施設の実践に学び、交流して輪を広げ、人が育つ地域をつくるための教育機関のあり方や仕組みなどについて、市民と公民館職員が共に語り合う場として、年に１回行われてきました。市民有志の実行委員と市内８公民館の職員によって企画・運営されています。

２．第７回テーマ

「語ろう知ろう、公民館のつなぐ力　～小櫃から広げる人の和、地域の輪～」

少子高齢化や地域コミュニティの弱体化が進み、「無縁社会」という言葉が登場するようになって久しくなりました。そんな中ですが、人や地域が“つながり合う”ことは地域を活気づかせ、豊かにしていく原動力になるのではないでしょうか。

そこで今年度は、公民館が持っている人・団体・地域を「つなぐ」機能に焦点を当て、その実践や課題に触れながら、公民館のつなぐ力や公民館でのつながりがもたらす力の可能性をみなさんと考えていく集いとしたいと考え、開催しました。

３．開催期日　　１１月２８日（土）　９：００～１５：３０

４．日　　程　　（略）※１ページ参照

５．会　　場　　君津市小櫃公民館（君津市末吉 128　電話：35-2488）

６．募集チラシ　　４～５ページ

７．参加者数　　約６０名

８．主　　催　　共に学ぶ市民の集い実行委員会（有志市民、君津市公民館連絡会）

９．協　　力　　体育協会小櫃支部・スポーツ･レクリエーション推進員小櫃支部
スポーツ推進員小櫃地区

募集チラシ・表

第７回　共に学ぶ市民の集い

小櫃から広げる 人の和 地域の輪

日時　平成27年**11月28日(土)**
９時～１５時半

会場　**小櫃公民館**　君津市末吉 128　※現地集合

内容　午前：小櫃を巡る**「おしゃべりウォーク」**
※約７キロ。歩きやすい服装でお越し下さい
午後：公民館･地域活動の報告・情報交換会
「語ろう！知ろう！公民館のつなぐ力」

参加費　１０００円（昼食・茶菓子・資料代など）　※当日集金

申込み　【申込み・問合せ】小櫃公民館　35-2488
10月22日(木)～11月13日(金)先着順（定員60名）

主催：共に学ぶ市民の集い実行委員会(市民・君津市公民館連絡会)
協力：体育協会小櫃支部・スポーツ･レクリエーション推進員小櫃支部・スポーツ推進員小櫃地区

詳細は裏面をご覧下さい

共に学ぶ市民の集い ―あなたの学びが豊かなまちをつくる出発点

集いの目的

人と人とが学び合い、育ちあう関係づくりの中で共に手を携え、豊かな暮らしと地域をつくることがますます大切になってきています。

市内の社会教育施設の実践に学び、交流して輪を広げ、人が育つ地域をつくるための教育機関のあり方や仕組みなどについて、市民と公民館職員が共に語り合う場とします。

今までの集い…

平成 20 年の生涯学習フェスティバルにおいて、君津市公民館連絡会主催で「ギャラリートーク」と「地域の学びの活動展示」を行いました。翌年からは、実行委員体制で市民と公民館職員が「共に学ぶ市民の集い」を開催しています。

これまで市民による各地区の特色ある活動を取り上げ、久留里のまちづくりや小糸の少年相撲大会、周南の地域活動、清和の伝統芸能など、現地に足を運んで学んできました。

今回の集いは… ＜語ろう！知ろう！公民館のつなぐ力＞

おしゃべりウォーク

午前中は、小櫃地域をゆっくりおしゃべりしながら歩く“おしゃべりウォーク”を実体験。第5回を迎える今回のコースは、小櫃公民館を出発して俵田方面をめぐる約 7 キロの道のり。

コース上の小櫃小学校、白山神社・白山神社古墳〔県指定史跡〕、上総掘り跡では、児童や地元のみなさんが、取り組みや由来について説明する。

かやぶき屋根の葺き替え

周南公民館裏山遊歩道にたたずむ山小屋「南山荘」。囲炉裏とかやぶき屋根をしつらえ、周囲を見渡すことのできるこの施設は、平成15・16年度に住民有志の手づくりによって建てられた。

10 年を経て、かやぶき屋根に傷みが見え始めたことから葺き替えようとの声が上がり、今年１～２月、２２日間・延べ１７３人の方の手により葺き替えられた。この様子を紹介しながら、公民館の「つなぐ」機能を考えてみたい。

家庭教育学級からサークルへ

君津中央公民館の家庭教育学級で体験したお話会を子どもたちにも是非届けたいと、有志でサークル「まほうのらんぷ」を結成した。

図書館司書に指導を受けた後、小学校に依頼し朝のお話会から始まり、近年は毎学期全学級にお話会を開催している。公民館が同じ思いの人をつなぎ、行動に移す後押しをした結果、地域へ活動が広がった。

■申込方法

電話または直接、小櫃公民館まで申し込みください。参加者全員の氏名、住所、電話番号、年代をお知らせください。その他配慮が必要な事項がありましたらお知らせ下さい。

■会場：小櫃公民館

君津市末吉 128　35-2488（※現地直接集合）

久留里線でお越しの方

【行き】君津駅から　※木更津駅で乗り換え

君津発	木更津着／発	小櫃着
7：10	7：16／7：24	8：01
8：00	8：06／8：20	8：57

上総亀山駅方面から

上総亀山発	久留里発	小櫃着
7：52	8：12	8：20

【帰り】小櫃駅発　上り（木更津方面）15：50、16：52
下り（上総亀山方面）16：24

お車でお越しの方

駐車場ご案内
①小櫃公民館前
②行政センター駐車場（スーパーヤナイ前）
③農協駐車場

「おしゃべりウォーク」

主　催　　体育協会小櫃支部、スポーツ・レクリエーション推進員小櫃支部、
（当日の案内）　スポーツ推進員小櫃地区

今回の「共に学ぶ市民の集い」では、午前中のプログラムとして小櫃地区で毎年開催されている「おしゃべりウォーク」に参加した。

（※〇数字は、１ページの地図と対応）

①小櫃公民館

②Ｂ２９墜落跡（小櫃診療所南西側の水田）

◎【説明：安藤昭雄氏】

川田村（現在地点）には、8 軒ほど家があったが、低地のため雨の度に一面水が溜まる土地であった。そこで、高地に居住区を移したようだが、高地では田を作ることができなかったので、上総掘りを考案してお米を作るようになった。

小高くなっている場所は、中世の戸崎城があった所。戸崎城跡の向こう側には、戸崎古墳群といって大小の古墳がある。

③徳蔵寺（真言宗）【説明：安藤昭雄氏】

「上総掘り」考案者の一人である大村安之助が、旧俵田村に住んでいた。大村安之助は、初めのうちは棒をついて井戸を掘っていたが、色々な所から技術を学び、竹ひごを使って掘る「上総掘り」を考案した。この辺りにもその技術を伝え、大村安之助と一緒に井戸掘りをした人もいる。上総掘り関連の地ということで、寺門の前に上総掘りの記念碑がある。俵田は土地が高く、昔は米が取れず稗や粟を食べていた。「俵田に嫁や婿にはやれない」と言われる程、貧しい地域だった。

徳蔵寺には、以前白山神社の脇にあった神宮寺が明治の神仏分離によって廃止になった時、神宮寺にあった大般若経が徳蔵寺に伝えられ、現在も保管している。

◎俵田駅近くの道標　【説明：安藤昭雄氏】

江戸時代の道標。「是よ里北は江戸おか道なり」「是より西は江戸ふなみちなり」と記されている。

◎白山神社　【解説：君津市教育委員会文化振興課　當眞紀子】

ご祭神は菊理媛神（ククリヒメノミコト）と弘文天皇（＝大友皇子）。御祭神が第 39 代目天皇の弘文天皇ということで、拝殿の正面に、菊の御紋が彫られているようである。壬申の乱（672 年）で大海人皇子に敗れた大友皇子が俵田に逃げてきたという伝説が小櫃地区には残っており、明治 3 年に明治天皇が大友皇子を弘文天皇として正式に命じた。

神社由来の詳細は不明だが、天武天皇の時代（壬申の乱勝利後、685 年頃）になってから、自分が打ち負かした弘文天皇を祀ろうと、天武天皇がこの神社を建てたと言われている。この神社は、元は「田原神社」と呼ばれていたが、明治維新後に白山神社と改称し、郷社とな

った。郷社とは、神社の格式の１つ。『小櫃村誌』によると、現在の社殿は大正 15 年（1926 年）に建てられたという記述がある。

建物の造りは、拝殿、幣殿（へいでん）、神様のいる本殿からなる。大工であった俵田の安藤作兵が建て、彫り物は安房出身の後藤忠明が手掛けており、忠明７７歳の頃の作とされている。

敷地内には、三猿が彫られた庚申塔があり、銘文から 1669 年のものだと分かる。この地域では古い石造物であり、君津市史にも掲載されている。

【補足説明（１）：安藤昭雄氏】

小櫃の地名について、由来が 2 説ある。1 つは、弘文天皇を「お櫃」に入れて葬ったことから→お櫃→“おびつ”になった説。もう 1 つは、中世の頃、“小櫃氏”という支配者がいたことから“おびつ”になったという説である。

祭神の菊理媛神は、神話に出てくるイザナギノミコト、イザナミノミコトの仲介をした神様なので、この神社は縁結びにご利益があると言われている。菊理媛神を祀る白山信仰の元は石川(県)の方であるが、白山信仰が広がって、全国に白山神社が建立された。

【補足説明（２）：渡邊護 実行委員長】

昔から白山神社のお祭りは大賑わいで、小櫃の村民大会と白山の祭りは小櫃総出で取り組んでいた。小櫃中の人が集まり、祭りの日は久留里線の臨時停車場所ができるほどだった。

④白山神社古墳　【説明：安藤昭雄氏】

発掘調査をしていないので、何が埋まっているか分からない。明治時代に、この付近にある丸型の古墳を掘ったところ、古い刀・ツボなどが出てきた。小櫃には３つの大きな前方後円墳があるが、その１つはこの白山神社古墳。全長は 89m、古墳時代前期につくられた古墳である。壬申の乱で敗れた大友皇子の墓といわれてきたが、皇子の亡くなった時期より、古墳の時期が 300 年ほど古いとされていて、伝説のとおりではないようである。

⑤小櫃小学校　校庭

小櫃小学校内には、シンボルとしての欅の木がある。子ども達が作った歌「けやきの木によせて」（作詞：平成 21 年小櫃小 6 年、平上浩之教諭　作曲：御園奈美教諭）があり、入学式や卒業式で歌っている。

⑥Ｂ２９操縦士埋葬跡

Ｂ２９が墜落した時、亡くなった敵兵を米俵に入れて、俵田の人がこの穴に埋葬した。死者であっても敵兵であれば粗末に扱うことが当然に行われていた時代に、亡くなった敵兵を米俵に入れ、俵田の人は丁寧に葬ったという。戦後、遺体を収容しに来た米兵が、その小櫃の人の行いに大変感謝したということだった。

「おしゃべりウォーク」当日配布資料①

「おしゃべりウォーク」当日配布資料②【次頁から】

小櫃小学校の児童が調べた小櫃の歴史と伝説

1　古墳時代　（1）小櫃の古墳の数と分布（2）古墳の形（種類）（3）小櫃の３大古墳
　　（4）古墳の調査と出土品（5）田原神社（白山神社）

2　弘文天皇伝説

3　戦争（第２次世界大戦）と小櫃
　（1）出征兵士と戦死者
　（2）戦争被害　・戦闘機の流れ玉　・アメリカ軍の爆撃機Ｂ２９の墜落（※補足資料）

上総掘り　（君津市立久留里城址資料館資料）

1　上総掘とは　　2　上総掘の歴史

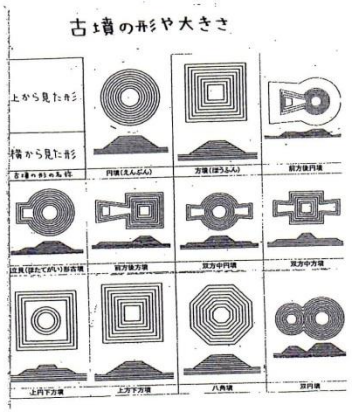
古墳時代

古墳とは、土を盛って作った墓で発掘調査で出土する埋葬から支配者(リーダー)の墓という事が分かりました。

(1) 小櫃の古墳の数と分布

小櫃には、280基あり君津市の中では、一番多くあります。
分布は、岩出と戸崎に多くあり、山本三田、長谷川上新田、青柳寺沢俵田の白山神社、小学校の体育館の所にもありました。
戸崎近辺が最も多く**31**あります!

(2) 古墳の形(種類)



小櫃には、前方後円墳と円墳と方墳があります。
前方後円墳は、9基です。
あとは、円墳と方墳です。

(3) 小櫃の3大古墳

白山神社古墳

白山神社古墳は全長89mで、古墳時代前期です。この辺りに古代馬来田国造が置かれたといわれ、その関係の有力者の墓ではないかと言われています。

浅間神社古墳

浅間神社古墳は、箕輪地区の境の浅間山の山頂に立地しています。大きさは100mを超える大きな前方後円墳ですが、後円部分を削って浅間神社が建っています。

飯籠塚古墳

岩出にある飯籠塚(いごづか)古墳は全長約102mで市内最大級の前方後円墳です。築造年代は、四世代後と推定され、墳丘保存度が極めて良好な古墳であります。

(4) 古墳の調査と出土品

古墳の発掘調査は、道路や建物をつくる場合に調査が行なわれます。専門の人達によって土を掘り調査されます。

出土品

(5) 田原神社（白山神社）

造られた年代は、683年となっています。田原神社から俵田神社となり、明治時代に白山神社となりました。まつられている神は、大友皇子と菊理比売神です。

(6) 万葉集に出てくる馬来田の防人の歌

歌 馬来田(望陀)嶺ろの笹葉の露霜の濡れてわ来なば汝は恋ふ

歌意 馬来田の山のささ葉が露霜に濡れているように濡れて私が来たなら、お前は私に恋い焦がれるだろうよ。

2)庚申塔

俵田の白山神社には庚申塔（こうしんとう）という石碑があり、そのこうしんとうには、三びきの猿がかれていて、その三びきの猿には1びきずつに意味がこめられています。右の1びきは見ざる、真ん中の1びきは聞かざる、左の一びきは、言わざるです。このこうしんとうには、小櫃俵田村と書かれていて、1669年に表記され、小櫃最古の表記といわれます。中世以降の信仰で、庚申日の夜に集まって行なわれ、ねている時におじゃま虫が神さまにその人の悪い事を告げると寿命がちぢむといわれ、眠らないで念仏をとなえる講（こう）の石碑です。

3)武田氏の城

次に小櫃一帯を支配していた武田氏の城についてです。武田氏は最強の騎馬隊で有名な戦国武将の1人です。武田氏は、1456年に現在の木更津、馬来田の真理谷に城をつくり支配を始めました。今は無くなって少年自然の家の広場になっています。武田氏は真理谷に城をつくったあとすぐに小櫃一帯を支配しました。

弘文天皇伝説

① 今から1300年以上の古代に、第39代の弘文天皇が小櫃に住んでいたという伝説があります。天皇がこの小櫃に住んでいたなんて信じられない話ですが、住んでいたとされる館や関連する場所が地名になって伝えられてきました！そのことを簡単に紹介します。

② 伝説の主人公である弘文天皇は、第38代天智天皇の皇子で、大友皇子と呼ばれ、今の滋賀県のびわ湖のほとりにあった近江の宮殿に住んでいました。671年になって、天智天皇が病で倒れ、弟の大海人皇子に後を託そうとしましたが、大海人皇子は断って、吉野へ隠居し、大友皇子が、皇太子になりました！

③ 12月に天智天皇が病死して半年過ぎた7月、吉野で隠居していた大海人皇子が兵を集めて近江の都へ攻め入り、天皇の地位をめぐって戦いとなりました。戦いは、壬申の乱といわれ、大海人皇子が勝って、第40代の天武天皇となったことと、負けた大友皇子は、長等山の山前で自害したことが日本で最も古い歴史書と言われる「日本書記」に書いてあります！

④ ところが戦いに負けて死んだとされた大友皇子は、身代りで、本当の大友皇子は逃げて、側近と供に船で瀬戸内海に出て、紀伊半島をまわって途中2ヶ所に寄って水や食料を補給しながら、東京湾に入り、小櫃川をさかのぼり、遠水といわれる小川の近くに館をつくり、再起の準備をしたといわれています。

⑤ 館のあった場所は白山神社の西側で王城台（現在は青木台）という地名になっており白山神社周辺は館の内という地名になっています。また神社北側の[illegible]二さんの屋号を館の内といわれています。

⑥ この他にも関連する地名があるのでしょうかいします。小学校の南側にゴルフ練習所との谷は王谷という地名になっておりここに宅地があり在原敏雄さんの家の屋号は王谷といわれています。

⑦ 小学校の南側には壬申の乱と呼ばれた壬申山がありその山から長谷川川方面へいくつかの谷があります。御馬り谷という地名の所は天皇がの乗馬をかっていた馬屋があった場所ともいわれています。末吉という地名は天皇が多くの兵が集まったという知らせを聞いて「末は吉」と言ったことから末吉といわれるようになりました。

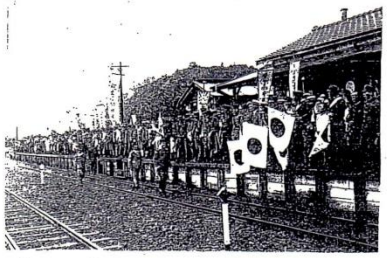
⑧ こうして再起の準備をしていたことが壬申の戦いに勝った大海人皇子につたわり使者がやってきて戦いもしないで従えといりました。この時の使者が来っていた場所は使者穴という地名でここに宅地があった川崎水道の屋号は使者穴といわれています。

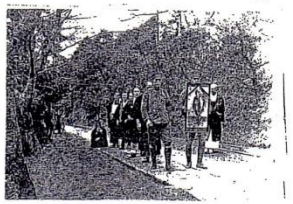
⑨ 使者を追い返えした後大海人皇子は、5000人ともいわれる大軍で小川の御所に攻め入っていきました。弘文天皇の軍は御所のはと外に分かれて戦い、小櫃川の戸崎では、戦いで死んだ七人士の塚や左近塚があります。

⑩ 御所の中にいた弘文天皇や側近は川づいたいた上流に逃げていったが追手に見つかり、そこで腹を切って自害し、流れた血で川が赤染まったといわれ、それからこの川を御腹川というようになったそうです。小学校の北側の川が御腹川で近くに腹川という地名の場所があります

⑪ 亡なった弘文天皇の遺体は、米を入れる御櫃に入れて今の白山神社付近にほうむったとされ白山神社にまつられている。小櫃の地名の由来ともされています。

⑫ この他にも関連する地名があります。君津青葉高校の天王原キャンパス付近も天王原という地名で天皇が富山方面まで行った時にここで休んだ所といわれています。

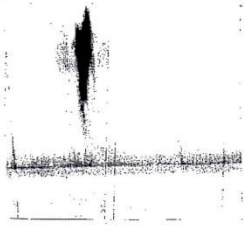




出征(戦地へ応召される兵士)を小櫃駅で多勢の人々が見送った様子

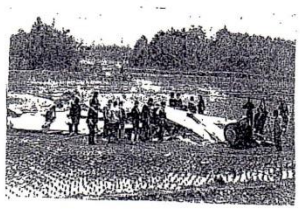
戦争で死んだ人(戦死者)のそう式を小学校の校庭で行なわれ学問坂を登る戦死者の母親は悲しんで道にしゃがみこんでいます。

・小櫃での戦争の被害



ばくだんが西原に5発落され辻堂の松が飛ばされたりした他、日本の戦とう機との空中戦による流れ弾が小学校の玄関や戸崎の万福寺と斉藤さんの家に当たりました。
万福寺の天井と壁には今も弾の穴が残っています。

・B29の墜落



アメリカの爆撃機B29は昭和20年(1945年)4月15日夜、診療所の南、中学校の東側の田んぼに、墜落した。
このB29は、東京湾で攻撃され、西原、加恵渕、白山神社上空をまわって小学校上空で2人が脱出、1人は死亡したが1人は生きていて山を下って朱吉の田村さんの物置にかくれていたそうです。

＜小学校資料の補足説明＞

小櫃村にアメリカ軍の「B29 爆撃機」が墜落

昭和 20 年（1945）4 月 15 日午後 10 時頃、小櫃村末吉地区（現小櫃診療所付近）にアメリカ軍の大型爆撃機 B29 が墜落しました。

この日、神奈川県川崎市を爆撃するためグアム島から飛来した 219 機のアメリカ軍機は、日本軍の対空砲火などを受けて１１機が三浦半島と房総半島周辺に墜落したとの調査記録があります。

B29 には通常 10～12 人の兵士が搭乗していたようですが、小櫃に墜落した B29 の場合、4 人が墜落死、6 人がパラシュートで脱出し、地上で捕虜となっています。

墜落死した搭乗員は、小櫃小学校東側の山頂（現小櫃の森）の俵田地区共有林に地元の人々の手で埋葬されました。

パラシュートで脱出した搭乗員は木更津から墜落地の小櫃周辺に降下して捕まり捕虜となりました。小櫃でも末吉地区で一人の搭乗員が発見されています。

幸い命が助かり捕虜となった搭乗員ですが、その後、母国へ帰還した者は 1 名、その他の 5 名は収容されていた東京の収容所で母国アメリカ軍の爆撃による火災で焼死しています。

※ この B29 墜落事件については、「小櫃村誌」と「POW 研究会」資料を参考にしました。「POW 研究会」資料はインターネットに公開されています。

平成 23 年 10 月 12 日発行

上総掘り

かずさぼり

深井戸掘削の技術

君津市立久留里城址資料館
〒292-0422 千葉県君津市久留里字内山
電話：0439-27-3478 FAX：0439-27-3452

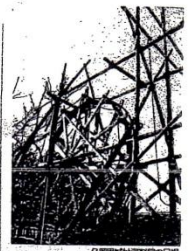
上総掘りとは

上総掘りは日本を代表する掘り抜き井戸工法です。君津市域の職人たちが育み、明治中期に成立しました。「上総」は君津市を含む千葉県中央部の旧国名です。技術が全国に伝播する中で、上総式の工法という意味で認知されるようになったと考えられています。

その上総の地質であれば、職人は通常2～3人で、動力を使わずに150～500m 程度の井戸を掘削しました（1400m の記録もある）。細長い鉄管を竹製のヒゴでつるし、地上から鉄管の自重を利用して地面を突き、直径5～10cm の孔を掘り進むのです。

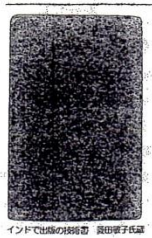
君津市の地下には、水が圧力を受けた状態の帯水層が幾重にもあります。帯水層は深いのですが、その層まで掘削できれば、水が自噴する（自然に湧き出す）ため、汲み上げる必要がないのです。井戸から水がこんこんと湧く様子も、上総掘りを象徴する風景です。

上総掘りの基本的な用具には、ホリテッカンなどの鉄製品を除くと、竹・木材・粘土など、手に入りやすい素材が使われます。上総掘りが君津市域で成立した背景には、河岸段丘の地形で河川が低い位置を流れ、灌漑用水の不足に悩む実状がありましたが、市域の地質や、材料の竹や粘土に恵まれていたことも挙げられます。



久留里城址資料館の足場

潜孔用の井戸



インドで出版の技術書　長田栄子氏蔵

上総掘りの歴史

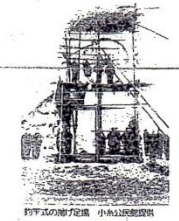
井戸といえば、つるべ井戸などの浅井戸（掘り井戸）が連想されます。江戸時代になると、水が自噴する地域を中心に掘り抜き井戸が登場します。この井戸は、重い鉄棒をつなぎ、高い櫓から落として掘削する工法で掘られ、19世紀初頭には絵馬や浮世絵に描かれました。君津市域でも1818年（文政元）に「金棒（鉄棒）」で掘削した記録があります。鉄棒では30～50mの掘削ができたようですが、この工法に大幅な改良が加わり、上総掘りが成立するのです。

改良の第一歩として1882年（明治15）、鉄棒を樫の棒に換えて、一挙に50～60間（約90～110m）を5～6人で掘削可能になったと伝えています。その後も様々な材料と組み合わせが試され、やがてタケヒゴとホリテッカンで200～300間（約360～550m）の掘削が可能となりました。掘削深度を上げたこの組み合わせが、上総掘りの一番の特徴といえますが、その後に整う一連の用具（ホリテッカン・スイコ・タケヒゴ・ヒゴグルマ・ハネギ・シュモク）と粘土水の利用があって「上総掘り」と呼ばれています。用具は明治10～20年代に順次考案され、考案者として旧中村の池田徳蔵・石井峯次郎・沢田金次郎・旧俵田村の大村安之助の名が知られています。

上総掘りは、掘削深度・経費・安全性・技術習得面などから画期的だったため、成立後全国に拡がります。明治後期にはインドでも技術解説書が発行されました。上総掘りは水井戸のほか、温泉や石油の掘削で成果をあげ、鉱山の試掘、戦地での築営にも利用されたようです。

農地解放後の1955年（昭和30）頃まで、上総掘りは盛んに行われました。しかし、ボーリング技術の普及・上水道の整備、耕地でのポンプ利用・土地改良が進み、減反政策がとられた1970年代（昭和45～）には、上総掘りは産業としての役割を終え、姿を消しました。

しかしその評価は衰えず、用具が国の重要文化財となります。やがて国際貢献の場でよみがえり、現在は生涯学習・学校教育、そして地域おこし等の新しい使命を帯びて活用されています。一方で、技術の総合的な習得は容易ではなく、伝承への取り組みが進められています。



初年式の動力足場　小糸公民館提供

鹿児島温泉掘削記念　石井みゆき氏蔵

１．小櫃公民館の取り組み～「連携」ってなんだろう？いろんなカタチの連携～

小櫃公民館　副館長　藤平　裕子

１．はじめに

小櫃公民館は昭和４９（１９７４）年に開館した公民館で、君津市内に８館ある公民館の中では３番目に古い歴史をもっている。昨年は開館４０周年という節目を迎え、記念式典挙行や記念誌発行という事業も実施した。まずは、小櫃の地域性をご紹介したい。

昔から小櫃というと“教育の小櫃”といわれている。優れた教育者も大勢いらっしゃって、教育についての関心がとても高い土地柄である。教育についての関心が高いということは、自然とこどもたちに寄せる関心も高い、ということ。いわゆる“地域全体でこどもを見守る”という土壌がすでにある。このことは、私たち公民館の職員にとって非常にありがたいこと。私は、公民館に携わるのは、この小櫃公民館が初めてだった。なので、自身の中に比較材料がなく、この小櫃の地域性のすごさに、すぐに気づくことが出来なかった（今思うと、ちょっとも勿体なかった）。とにかく、地域でこどもを守る、というすばらしい土壌が、ここ、小櫃にはある。まず、このことを皆さんの頭の中にインプットしていただきたい。それと、小櫃にお住まいの７０代、８０代の方はとってもお元気、ということも挙げておきたい。

さて、そういう地域の中にあって、小櫃公民館はどんな取り組みをしてきたのか、どんな連携をすすめているのか、ということをご紹介したい。今回の発表については、公民館としてどんな内容にしたらよいだろう、ということを職員間で話し合った。その話し合いの結果に基づいてお話しする。

２．「こども」をキーワードに

まず、「こども」がキーワードになっている連携についてである。

一番目にお話しするのは「小櫃の元気なこどもを育てる会」について。君津市で全市的に展開されている青少年健全育成事業が、小櫃においては「小櫃の元気なこどもを育てる会」

という名称ですすめられている。会の中に、環境整備部会・連携部会・広報啓発部会という３つの部会があり、明確な役割分担がなされ、地域ぐるみで青少年の健全育成に携わっている。公民館は、小櫃小学校・小櫃中学校とともに事務局を担っているが、公民館長は広報啓発部会の部会長を務めている。『きずな』というのがこの会の広報誌である。私は編集委員のひとりとして、この『きずな』の取材や原稿執筆に関わったのだが、着任当初、比較材料がなかったために実感することができなかった小櫃の地域性のすごさは、編集作業の中で体感することが出来たと分析している。

この「小櫃の元気なこどもを育てる会」との連携の中での公民館の立ち位置というのは、構成要素のひとつとしてとらえられる一方、私は『きずな』という広報誌を媒体として地域をつなげている、という自負も抱いている。

次に挙げるのは「子ども会等関係者会議」である。

どこの地域でも少子化というのは切実な問題であり、そこを少しでもよい方向へ調整するために、年に１回開いている。名前のとおり、子ども会等の関係者が集まり、様々な情報交換を行っている。“子ども向けのこんな行事をやっていますよ”というお知らせから、“Ａ地区の子ども会と合同でバス旅行をしませんか”という提案など、人数が少ない、あるいは、足りない、ということで、こどもたちが不利益を被らないよう、地域のみなさんが知恵を出し合う機会にもなっている。この場面での公民館の立ち位置というのは、交通整理というか調整役、ということになるかと思いう。

３つめは、午前中みなさんにも参加していただいた「おしゃべりウォーク」である。もともとは、地域のスポーツ関連団体のみなさんが、こどもたちのために企画したもので、当初はこの他に元旦マラソンもあったそうだ。現在も続いているが、小櫃には地区の体育祭があり、この体育祭以外に、もっと幅広く手軽に参加できる運動系の催しをやろうという趣旨でスタートしたと伺っている。

この「おしゃべりウォーク」のすばらしいところは、ゆっくり自分のペースでおしゃべりをしな

がら歩けること。こどもたちも無理なく参加できて、家族以外のおとなのひとと交流が出来、また地域の隠れた名所を知ることも出来る。ちょっとした体力づくりにもなり、そして完歩証もいただける。こんなすばらしい企画なので、第３回目の「おしゃべりウォーク」の時は、公民館側は主催事業の「小櫃っ子アドベンチャー」も便乗させてもらったこともあった。この時はうまく“つなげる”ということが出来たのだが、関係が希薄になってしまった年度もあり、お互いに関わり合い方を模索している部分がある。いずれにしても、今後はよりよい方向へ進んでいけたらいいなあと思っている。

この他、キーワード「こども」に、学校という要素が加わった連携についてご紹介したい。小櫃公民館の高齢者学級は「ほほえみ学級」という名称で実施しているが、その「ほほえみ学級」と小櫃小学校１年生との交流事業についてである。

小櫃にお住まいの７０～８０代の方はとてもお元気とご紹介したが、その方たちが学級生として参加してくださっているのが「ほほえみ学級」であり、その学級生のみなさんがとても楽しみにしている事業が小櫃小学校１年生との交流会である。

１年生のこどもたちにとっては、よそのおじいちゃん･おばあちゃんなのだが、お互いにすぐに打ち解けて、とても楽しい時間を過ごすことが出来た。今年度はいっしょにカレーライスを作って食べたり、またけん玉やおはじきなどの昔遊び、学級生と一年生がペアになって「オレオレ詐欺抑止カルタ」のカルタ取りをしたりと、楽しく過ごした。この連携は、公民館と小学校が寄り添って展開している事業で、どちらか一方だけでは成立し得ない事業。年に１回の実施だが、回数を増やせたら良いとも考えている。

その他の連携として、「長谷川地区ほたるフェスティバル」についてお話したい。この長谷川地区のみなさんとの連携は、２６年度に一度途絶えたいきさつがある。公民館と長谷川地区のみなさんとの間に認識の誤差があったことが原因なのだが、一番の反省すべき点は公民館側の説明不足にあった。

公民館が、地域や団体と関わる中で最終的に目指している目的のひとつに、地域の（あるいは団体の）自治能力の向上に資する、ということが挙げられる。この到達点について、公民館側と長谷川地区のみなさんの間にズレがあり、そのことについてきちんと公民館側が説明をしなかったことは肝に銘じて反省しなくてはいけないこと、と職員間で話し合った。つまり独り立ちをしていただくのが最終目的としても、そのタイミングは双方できちんと諮ろう、ということである。連携する上での難しさを教えていただいた事例であった。

３．「成人を祝う集い」にて

さて、次に「平成２８年　成人を祝う集い」についてである。

小櫃地区では、平成２８年に新成人となる若者が約６０名いらっしゃる。その成人のお祝いを平成２８年１月１０日に開催することになっており、すでに実行委員会を新成人自身が立ち上げて、５回の会議を行い、案内状の送付というところまで準備がすすんでいる、と担当職員から報告も受けている。その会議の中で、実行委員から次のような提案があった。

それは、自分たちを育ててくれた地域のひとたちに、感謝の気持ちを伝える場を設定したい、そして、集いの場に積極的に参加してほしい、と。具体的には、みんなでお餅つきをしてお祝いしたい、ということなのだが、このことをある会合で“今度、新成人を迎えるこどもたちが、こんなことを提案してきたそうなんですよ”と投げかけたところ、すぐに地域のおとなの方たちが、“じゃ、臼と杵はウチで用意するよ”、“せっかくだからお餅は紅白にしたらどう？”、“人形劇で参加してお祝いしてあげたいワ”等々、打てば響くように、すぐに反応してくださった。

「平成２８年　成人を祝う集い」は、これから準備をすすめていく事業なので、最終的にどんなスタイルになるのか、未知の部分が多いが、これなどは本当に“教育の小櫃”というか、こどもたちのために何かやってあげよう、地域でこどもを育てようという小櫃のすばらしさが表れている事例だと思う。まだスタートしたばかりだが、実行委員の「新成人」と「地域」をつなげるという、まさに公民館の大事な任務を果たすことが出来る好例になるのではないかと、その日がどんなふうにして運営されていくのかと今から非常に楽しみである。

４．公民館に求められているもの

さて、終わりに、現段階での小櫃公民館職員の覚悟というか、モットーについてお話ししたい。

「公民館というのは、公（おおやけ）の施設で、その中には市の職員がいる」という、これだけで地域のみなさんからは信頼を寄せていただいている。“とりあえず公民館で聞いてみよう”、“公民館に行ってみよう”というスタンスで接していただいている。このことを忘れてはならないし、小櫃にあっては、地域全体でこどもを育てていくという土壌がすでにある、ということも肝に銘じておかなくてはならない。このことを踏まえたうえで、

①「公民館に求められているもの」は何なんだ、ということ、

②「地域になくてはならない存在であり続けるために」、果たして自分に君津市の職員として気概はあるのか、ということ、さらに

③「地域の教育力を高めるために公民館が出来ること」それはどんなことか、ということ、これらを常に自問していなくてはだめだろう、と思う。そして

④「地域と公民館の関係が職員の異動に左右されてはならない」ということ。

ある職員が異動したら事業が消滅してしまった、あるいは弱体化してしまった、というのは、残念だがよくある事例だ。それはとりもなおさず「館」の事業として確立されていなかったということの証左に他ならない。個人としてではなく、館の事業として、一本筋の通った計画性・持続性をもって、「連携」というつなぐ作業を職員一同、実践していきたいと考えている。

５．連携はいきもの

今回の『おしゃべりウォーク』の打ち合わせをしていた時に、ある関係者の方が「連携っていきものだからさ」っておっしゃった。ああいい言葉だなあと思って、ここに無断借用させていただいたのだが、「連携」というのは手をかけて育て上げていかなくてはならないもの、ということだと思う。ほったらかしにしていたら、やがて弱ってしまう。手をかけてきちんと育て上げるためにも、継続性というのはとても大事な要素。しかしながら現実を見ると、公民館主事（社会教育主事）は専門職なので着任してから５～６年は公民館に留まれるのだが、館長や副館長は２年で異動となることが多い。非常に悩ましい。「連携」を育て上げるためにも、また館として一本筋の通った事業を確立するためにも、専門職以外の職員にも、じっくり取り組むために正直もう少し時間がほしいと大いに感じているところである。

２．かやぶき屋根葺き替えから考える公民館の「つなぐ」

かやぶき葺き替え　参加者　黒澤美英子
周南公民館　　公民館主事　中村　亮彦

１．はじめに

公民館と裏山・遊歩道・南山荘の位置関係

今日のテーマは、公民館の「つなぐ」力。その一つの例として、周南公民館で今年１月～2 月に取り組んだ、南山荘の『かやぶき屋根葺き替え』の様子を紹介したい。

南山荘とは、周南公民館裏山の一角にたたずむ山小屋である。平成 15 年・16 年度に周南公民館利用サークルである[どうだん山の会]を中心とした住民有志や地域のボランティアの手で、裏山遊歩道の整備を行い、あわせて囲炉裏やかやぶき屋根を備えた山小屋を設置し、南山荘と命名された。大きさは３間×５間ほど。その約半分がかやぶき屋根となっている。設置から約１０年が経過し、かやぶき屋根の傷みが見え始めた事から、葺き替えをしようとの声があがり、今回のプロジェクトがはじまった。

２．葺き替え作業について

南山荘の外観（作業後）

期間は、平成２７年１月 14 日～2 月 20 日の２２日間。自治会選出の公民館協力員である地域活動委員や、主催事業の農業講座と周南みどり塾の参加者、公民館運営審議会委員、どうだん山の会、そして一般募集の個人参加と多くの皆さんに呼びかけ、実人数４８名（のべ１７８名）の参加をいただいた。

プロジェクトを始める時、職員の皆さんと“作業工程を映像で記録に残す”ことを相談し、たくさんの映像を撮り、完成後に６０分にまとめた。今日はその６０分のＤＶＤを１８分に編集した映像をご覧いただきたい。

【～以降、映像を見ながら～】

・葺き替えの指導は、職人であった渡邉和彦さんと経験されたことがあった髙橋榮一さん。お２人を中心に葺き替えを行った。

・私は、映像撮影をしていたのだが、最初のことは足場にあがることも遠慮があった。撮る方も撮られる方も慣れていないので背後（はしご等）から撮影していた。しかし、なるべく足を運び、縄の縛り方などの作業を積極的に教えて頂き、たくさんのおしゃべりをしていく中で親しくなり「この作業も撮ったら」と声を掛けていただけるようになり、少しずつ自然な姿を近くで撮影できるようになっていった。

・針やガンギなどの道具も手作りのもの。屋根の上部から針で縫う様に縄を通し、屋中竹・ホグダケ等をより頑丈に固定するため、縄を三重にしていく様子が映像に収められている。これは一つの例だが、他にもたくさんの工程や職人の技があり、目の当たりにできた。

・かやぶき葺き替えでは、実際に屋根にのぼっての作業はもちろん大切であるが、他にも、「屋根には上がれないけれど」と言って、囲炉裏に薪をくべて火の番や温かいお茶の準備をしてくれる人、薪を割ってくれる人、材料を調達してくれる人、買ったままでは使えない針金など、2 重に巻き直しておいてくれる人、足場でかやの上を歩くと滑って危険なので転んでケガをしないように休憩ごとに掃除をする人など、沢山の人がそれぞれ、できるところで・できる事をやってくださった。また、「こういう物が必要だね」「これはどうしよう」ということが色々あったが、自然と「こうしたらいい」「良いのがあるよ」と、アイデアなどが広がっていき、みんなでやれば何でもできる様な感覚があった。よく『みんなひとりひとりが主役』という言葉を聞くが、今回に限っては『縁の下の力持ちがいっぱいいる』と、お互いが思える様な“安心感”があった。

・周南の周は“あまね”とも読み〔すべての人と欠け目なくまじわっている。不足を補い満たす〕という意味があるが、今回のかやぶきのプロジェクトは周“あまね”の文字を持っている、周南ならではの地域性を感じられた、とても楽しく、貴重な経験だったと心から思っている。

３．かやぶき作業を実現させたのは数々の「つながり」

それでは、今回のテーマの「つなぐ」に話題を移して行きたい。

計画が始まったとき、材料は？道具や資材は？そもそも作業に協力してくれる人はどれだけいるのか？など職員は非常に不安だった。しかし、これらの不安は、まさに「つながり」の力によって解消された。例えば、参加してくれた団体や事業の参加者は、「面白そう」「公民館なら協力しよう」「公民館が言うのならば仕方がない」など様々な考えがあったかと思うが、これまでの公民館との関係性があって、多くの方が参加してくださった。また、カヤの調達では、今ではかつてのような管理されたカヤ山はない状態の中でも、公民館が「探しています」「こまっています」というと、「〇〇さんの土地に有るから、声をかけておく」と言ってくださる方、事業所に話をつけてくださる方がいたおかげで、実施することができた。いろいろな人のつながりによって、今回の葺き替えをすることができたのだと思う。

そしてこれは、一朝一夕にできることではなく、これまでの４０数年の公民館と地域の「つながり」の賜物であったのではないだろうか。主催事業やその参加者との人間関係を大切にしてきたこと、常に自治会との関係性を大切にしてきたこと、館報を定期的に発行したり、周年事業や記念誌発行などに定期的に取り組んできたりしたことで、地域で公民館の価値を認めていただき、受入れていただいたことが、今日の「公民館」と「地域」や個々の住民のみなさんとのつながりを作ってきたのではないだろうか。

これまで公民館と地域とのつながりによる力が今回のかやぶき作業で発揮されたのだと思う。

４．かやぶき作業を通して見えた公民館の「つなぐ」

今回のかやぶき作業を通して見えた「つなぐ」の姿を振り返ってみると、多くの人が携わったかやぶき作業は、まさに「共同作業」そのものであり、地域のつながり・協力の姿を見ることができた。

また、今回も作業を通して、普段出会わない人たちがつながり、１つの目標にむかって作業を進めた。８０代から、高校生まで参加があった。作業を通して新たな人間関係のつながりも生まれるきっかけになったのではないだろうか。

そして、十分とはいえないまでも、生活技術の一端を後世につなげるといった、少しちがった「つなぐ」もあったように思う。

５．あらためて思うこと

シンプルなことだけれど、「みんなでいっしょに何かをやる」ということは、非常に重要なことだと感じた。そしてその発信は、公民館ができることであるし、また、公民館がなすべき事なのではないだろうかと思った。

また、今回のかやぶき作業を終えて、公民館では「おもしろいこと」「すごいこと」ができるのだと私自身再認識した。おそらく参加されたみなさんも同様ではないだろうか。公民館が「つなぐ」機能をはたすことで、公民館活動・公民館事業・地域活動の可能性が広がるということをあらわしているのではないかと考えた。

しかしそれは、これまでの住民と公民館（職員）の人間関係（つながり）があってこそ、なされたこと。職員としては、十分に信頼して頂いていくことが大切だと改めて感じたし、意識や日々の気持ち、本当に地道な心がけと動きが公民館に「つなぐ」をもたらすのだと思う。

地域とつながること、地域内でのつながりを生むことというような、公民館が「つなぐ」機能を果たすことで、公民館が地域や住民のみなさんの役に立つ存在になり得るし、地域の活力を高める存在になるのではないだろうかと感じたこのかやぶきの作業であった。

３．家庭教育学級からサークルへ

まほうのらんぷ　齋藤　みどり

１．はじめに

まずは、お話会を楽しんでいただきたい。

～～「ヤギとライオン」の実演～～

私は「まほうのらんぷ」というサークルの活動をしている。これは、楽しいお話の世界と子どもたちとをつなぐ《架け橋》になりたいという思いで、活動を続けている母たちのグループである。

２．活動のきっかけは家庭教育学級

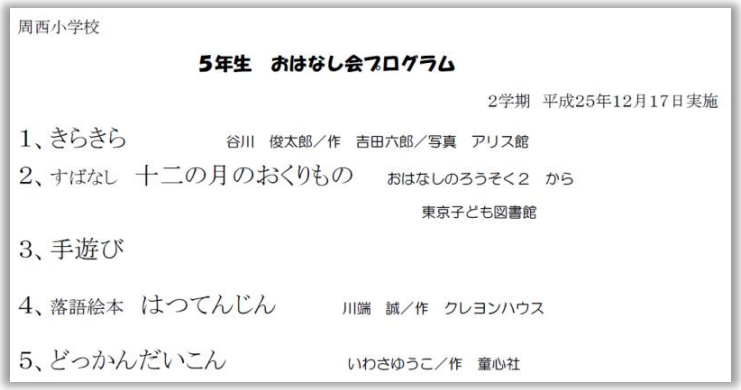
公民館ではサークル活動のほかに、子どもから大人が学ぶ主催事業があるが、私はその中で主に子どもの親が学ぶ家庭教育学級に参加していた。「まほうのらんぷ」の活動のきっかけは、その君津中央公民館の家庭教育学級「ひまわり学級」（平成１２年）で、お話会を体験し、同じように子ども達にお話を届けたいと思った数人が職員に相談したことだった。これは、担当職員の「聞いてみる？」という誘いによってプログラム化されたものだった。

３．サークル結成へ

そして、職員からサークルを作ったらどうかという声掛があり、サークルを結成することになった。サークルにするには名前は大事と、みんなで話し合い、いろいろなお話の世界が出てくるワクワクする「まほうのらんぷ」となった。会の目的や活動の仕方を明文化し共有するように会則を作ったが、その過程の話し合いで、会の方向性を話し合えたのが大切だった。

４．活動開始

職員が図書館司書の方に指導をお願いしてくれて、読み聞かせのスキルを身につけることができた。



周西小学校

5年生　おはなし会プログラム

2学期　平成25年12月17日実施

1、きらきら　　谷川　俊太郎／作　吉田六郎／写真　アリス館

2、すばなし　十二の月のおくりもの　　おはなしのろうそく２　から　東京子ども図書館

3、手遊び

4、落語絵本　はつてんじん　　川端　誠／作　クレヨンハウス

5、どっかんだいこん　　いわさゆうこ／作　童心社

学校にもお話会の実施を依頼しつつ、できるところで活動を開始した。例えば、講談社おはなしキャラバンに協力したり周西幼稚園誕生会でパネルシアターを実施したり、公民館で幼児向けお話会を行ったりした。学校で活動するにあたり、学校の意向と会の思いを

共有するため、毎年、年度初めに図書担当の先生と打ち合わせを持つようになった。

学校でも、朝や昼休みのお話し会を実施できるようになり、世の中の読書推進の流れもあり、平成１８年度からは毎学期、国語の授業時間を１時間いただき、全学級にお話会を実施している。

また、会員はそれぞれ「おはなしおむすび」や「昔話大学」等で学習活動もしている。様々な講習会のチラシを持ち寄って、みんなで学習をするようになってきた。

		１年生（H24）	２年生（H25）	３年生（H26）
４年生（H２４入学）	１学期	じゃぐちをあけると ⓓ　うりこひめこ はちうえはぼくにまかせて イボイボガエル　ヒキガエル	あつさのせい ともだちをたすけたゾウたち ⓓ　ヤギとライオン トマトのひみつ	ねえ、どれがいい？ はちうえはぼくにまかせて ⓓ　くわずにょうぼう イボイボガエル　ヒキガエル
	２学期	㊦おじさんのつえ ⓓ北風にあいにいった少年 ジミーのムーンパイ　アドベンチャー どうぶつのあしがたずかん	くまのおでかけ(人形) ジミーのムーンパイ　アドベンチャー ⓓかちかち山 どんぐりころころしぜんにタッチ	きらきら ⓓ馬方やまんば なんきょくのサンタさん みかん~かがくのとも傑作集
	３学期	カニ　ツンツン ⓓ花咲かじい ⓓやせたメンドリ みかん	ⓓたこのうらみ ねこのくにのおきゃくさま ⓓうりこひめこ おかしなゆきふしぎなこおり	みるなのくら 歯いしゃのチュー先生 ⓓスヌークスさん一家 パンダ　だいすきしぜん

H27　まほうのらんぷ　おはなし会　＜5・6年生＞

		1年生(H23)	2年生(H24)	3年生(H25)	4年生(H26)	5年生(H27)
5年生（H23入学）		ⓓ傘屋の天のぼり はちうえはぼくにまかせて やぎのはかせのだいはつめい ゆうがたにきくはなおしろいばな	うえきばちです ロバのシルベスターとまほうのこいし ⓓふるやのもり イボイボガエル　ヒキガエル	はだらくんジャー ⓓももたろう ともだちをたすけたゾウたち はしをつくる	うえきばちです ロバのシルベスターとまほうのこいし ⓓくわずにょうぼう イボイボガエル　ヒキガエル	
		ⓓとうふとこんにゃく としょかんライオン おばあちゃんおおせち みかん　かがくのとも傑作集	詩　ひらけごま ⓓ　ホレおばさん むかしむかし　とらとねこは どうしてちがでるの？	きらきら ⓓ北風にあいにいった少年 なんきょくのサンタさん みかん　かがくのとも傑作集	なにのあしあとかな ⓐ世界でいちばんやかましい音 たかこ かき~~かがくのとも傑作集~~	
		ものすごくおおきなプリンのうえで 歯いしゃのチューせんせい ⓓやきもち和尚 たねのさくせん	しまうまのさんぽ タタはさばくのロバ ⓓ　鳥のみじさ 大根はエライ	だじゃれオリンピック ねこのくにのおきゃくさま ⓓうりこひめこ おかしなゆき　ふしぎなこおり	ⓓ　みるなのくら おおきくなりすぎたくま ⓓ　スヌークスさん一家 しっぽのはたらき	
6年生（H22入学）	1年生(H22)	2年生(H23)	3年生(H24)	4年生(H25)	5年生(H26)	6年生(H27)
	ありんこぐんだん ⓓ足折れつばめ 野はらの音楽家マヌエロ はなのあなのはなし	うえきばちです ロバのシルベスターとまほうのこいし ⓓ傘屋の天のぼり ゆうがたにきくはなおしろいばな	でっこり　ぽっこり ⓐ　エバミナンダス ⓐ　はなのすきなうし ときがとぶ空	ⓓヤギとライオン おむすびさんちのたうえのひ ロバのシルベスタとまほうのこいし シャボンだまとあそぼう	にゅーっ　するするする ⓐなんでも信するおひめさま かさどろぼう ごはんですよおもちですよ	
	どっちもすき かがくのとも すさるかに合戦 としょかんライオン このあいだになにがあった？	あるひ　こねこね ⓓルンペルシュティルツヘン 落語絵本　めぐろのさんま ピーナツなんきんまめらっかせい	つきよのかいじゅう １つぶのおこめ ⓐ　ぬか福と米福 詩　ひらけごま	バナナじけん ⓐなら梨とり タタはさばくのロバ どっかん　だいこん	しりとりあそび あか・みどり・き ⓐ　金の髪 落語絵本　はつてんじん かがくのとも　あずき	
	しめとりえほんくろとしろ はなさかじい しつれいですが魔女さんですか しずくのぼうけん	チョコレートパン ねずみのとうさん　アナトール ⓓ　鶴女房 うんちのちから	どいてよへびくん ⓐ　いばらひめ うまそうだな　ねこ くうきはどこに？	あさになったので　まどをあけますよ ⓓ　七羽のからす 歯いしゃのチュー先生 まちにはいろんなおがいて	ⓐ　みるなのくら ねずみのとうさんアナトール ⓐ　だんなもだんなの大だんなさま バナナ　だいすきしぜん	
手遊	なかなかホイ 八兵衛さんと十兵衛さん やすべえじじいがうんぽんぽん	わし いわしをひらきましょ うさぎさんがでてきたよ	なかなかほい 弁慶 なっとう		てんぐのめん 大阪のうまいもん 茶つぼ	

５．会員募集

子どもが大きくなり会員が仕事を持つようになると、退会したり、平日の昼間に多くの時間をとることが難しくなったりする会員が増えできたので、会員募集を始めた。

学校で募集手紙を配ったが、なかなか手紙をくばっても、入会してくる人がいなかった。図書館にお話会の活動を問い合わせた人を図書館職員さんが紹介してくださったこともあった。今年は、誕生のきっかけとなった家庭教育学級で活動紹介をさせて頂き２人増えた。

６．始めるより継続が難しい

新しい会員が入っても、会の目的を伝えるために会則は重要である。いろいろなことが変わっても、みんなで話し合いながら考え決めていくことが大切だと考えている。最近では定例会を開けなくなり手続きマニュアルを作成した。

７．大切にしていること

より良いものを子どもたちに届けるために、プログラム作りを大切にし、全員では集まりにくくても、リハーサルをすることで確認している。これも図書館職員に教えてもらったプログラム作りの仕方を元にして実施している。お話会で使った本の実績表を作り、季節の本や同じ本を使わないように工夫している。

何と言っても、子どもたちの食い入る様な眼、笑顔のために！である。この活動が、「楽しみ」「やりがい」「生きがい」となっている。

８．公民館に期待したいこと

はじめるよりも継続が難しいとの思いがある。公民館や図書館でも読書関係の催しをしたときに、また、興味のありそうな人がいたら、職員には、参加者が普段の活動に結びつける働きかけをしていただきたい。

また、「まほうのらんぷ」の活動のきっかけが家庭教育学級だったのだが、各講座や学級で記録する習慣づけも、後々活動を追うためにも大切だと思う。時間や労力がかかることでも学級生・参加者が大切なことにしっかりと取り組めるようにお願いしたい。

私の周りでも地域での活動をしてきたサークルが相次いで解散している。公民館職員は、サークル活動で困っていることは無いか、気を配っていただきたい。例えば、サークル調査票に書けると良いのではないだろうか。

たくさんの人をつなげることはたくさんの人を知っていることが必要で、小さな声を拡げられるようにアンテナを高く持っていてほしいと思う。

分科会・全体交流会

①小櫃公民館の取り組み発表に関する分科会

■「連携」や「つながり」と公民館について

・連携という言葉を簡単に口にするが、それは大変難しいことである。人間関係ができていなければ、連携はできない。

・連携は「いきもの」である。

・連携が「いきもの」であるならば、育てていかないと成長していかない。

・日々の人との関わりの中で、生まれて始めて真の連携やつながりができるのではないか。

・長く活動を続けるためには、誰かが入口として活動していかなければならない。

・活動が終了したならば、その成果や課題をきちんと引き継いでいかなければならない。

・記録をする・伝えるということは、次の世代に伝わるということ。公民館が関わることできちんとつなぐ、更につないでいく、つながりができていく。

◎組織としてやっていかなければいけないこと。

◎きちんと引き継ぎつないでいくことは大事だが、組織は人が変わるのでそれを支えてくれるのは住んでいる地域の皆さんだと思う。

◎地域の皆さんと組織としてある公民館のやりとりを進めていければ公民館の可能性や力というものが高まっていくと思う。

■子ども

・異年齢交流のようなものを保護者も含め子どもたちが体験できれば、つながりも広がっていくのではないかと思う。

・普段何もしていない子どもたちもいるので、そうした子どもたちになるべくきてもらい、色々な体験をしてもらいたいというのが自分たちの仕事であると思っている。

◎子どもに関する話が多くなっているが、それだけ子どもというものが地域にとって大事であるということ。それに関連する団体を公民館が把握しているということが実態として今あると思う。

■公民館とのかかわり

・公民館との関わりができたのは、青少年相談員とのつながりがあり、事務局が公民館にあったことからである。

・仕事として携わっている方と、我々のような地元で経験をした方がいっぱいいる。

・最終的に残ってアドバイスできるのは地元に残った方である。そうした方を発掘する、誘い込むような活動ができるかは、教育委員会あるいは公民館の方々の手腕が問われる時期ではないかと思う。

■公民館の“つなぐ力”の「可能性」や、「このままではいけない」というご意見など

◎今のところ出てきている声としては、子どもたちに関わる面で、公民館のつなぐ力について期待が寄せられている感があるが、周南の事例のように文化・技術面のつなぐ力、人材の発掘もある。人材の発掘がなければつなぐということはなかなか難しい。
もしかしたら、公民館のつなぐ力を発揮する前に、地域に入り込んでいって人を育てる、見つけるというのが今必要ではないかと感じた。

②かやぶき屋根の葺き替えの発表に関する分科会

※南山荘のかやぶき作業の記録映像を放映。適宜解説しながら分科会を進行

■まずは、かやぶき作業への質問

・カヤを刈るのが上手だが、慣れている方がやったのか。
→昔は手刈りだったが、今では手刈りできる人もいないので、やむなく刈払機で刈った。手刈りの場合は抱えて鉈で根元から刈る。くずを混ぜると雨漏りしなくなるので、刈った後にくずを取り除いたりはしない。

・指導した人は何人くらいいるのか。
→現在、周南には屋根職人だった方が 2 人いるとのこと。そのうちのお 1 人（渡邉さん）が協力してくれた。昔は屋根を葺く作業は近所の人総出で手伝っていた。

・渡邉さんと公民館はどういうつながりがあったのか。
→周南公民館サークル「どうだん山の会」の会員だった。その後も、公民館主催事業の参加者や、お飾り作り教室の講師、利用サークルの会員などとしてつながりを継続してきた。

・世の中には利己主義がはびこっているが、この葺き替え作業は周南の人が総出で行っているのが素晴しい。かやぶきのみならず、ぜひ伝統を伝えて、いい流れになってほしい。
→祭りの幟の縛り方も、もう誰にもできなくなっている。昔は神社のしめ縄は 1 軒ずつ当番制だったが、今はできる人が限られている。家庭用のお飾りも地区全体を対象に公民館で教えている。

・カヤとアシの使い分けは。
→カヤとは屋根を葺くのに使う草の総称で、アシやススキを含むが、一般的にはススキを指す。アシはとても硬い。
→昔は山をきれいに手入れしていて、ススキで揃えていた。今はヨシも含まれてしまうが、刈払機を使うので気づかない。今回の作業ではススキだけでは丈が足りずヨシも使った。

■発表を聞いての感想は？

・NHK のテレビ番組で、白川郷の屋根の葺き替えを見た。地域の結で行っていた。こういう作業が日常的にあった時代には、人と人とのつながりが自然に持てていたのではないか。今回の事例から、公民館は人と人とのつながりを作るだけでなく、技術の伝承を担うこともできるのだと知った。周南の地域性に感心した。

・子どもの頃は茅山があり、屋根を葺いていた記憶がある。

・小櫃に初めて来た。また参加したい。

・昭和 35 年くらいまでは清和でも屋根を葺いていた。職人がいなくなり、今後どうなるのか。

・屋根を葺く作業は見たことがあるが、今は業者がやっている。地域の人が総出で行っているのを初めて見た。

・地域の人が持つ技術を後に残すことの大切さ。技術が途切れることでの支障も起きている。

・おしゃべりウォークは天気が良くて良かった。かやぶきを君津でやっているとは知らなかった。

・人と人とのつながりに興味があって参加した。小櫃の人々が子どもたちに地域のことを伝えていく取り組みはとてもよい。市内全域に広がっていくとよい。

・九州にいた頃、かやぶきの家に住んでいた。夏は涼しく冬は温かい。

・昔は葺き出しの時に麦わらを使っていたが、今はどうしているのか。
　→今は麦わらが手に入らないので、カヤの上の方を切って代用した。

・おしゃべりウォークでは、普段車で通っていては気づかない地域のことに気づかされた。屋根について現代では葺き替えも無く便利になっているが、人のつながりは薄くなっている。

～周南のかやぶき作業に実際に関わった参加者から～

・カヤ刈りと運搬に参加した。

・10 年前に南山荘を建てるときは他人任せだったが、今回はやる人がいなくなったこともあり、声がかかって手伝うことになった。

・発表に際して、「かやぶき」と「つなぐ」というテーマをどう関わらせるか最初は困ったが、「かやぶき」の作業そのものが「つなぐ」の形であったし、また、伝統をつなぐということも大切だと気づいた。

・縁の下の力持ちがたくさんいた。はさみを持つのも屋根に上がるのも初めてのことだったが、地域の人とのつながりで無事に作業を終えることができた。

■意見交換

・各館の課題を見据えた活動が求められている。

・どんな公民館になったら魅力的か。

・伝統が守られていない。日本全体で多くの伝統が消えていっている。公民館だけでそれ

をつないでいくことはできないが、口火を切り、盛り上げていくのは公民館の役目だと思う。職員を減らすなどもってのほかだ。

・「公民館のつなぐ力」について住民の率直なイメージは？
　→きっかけをつくってほしい/公民館に関わるようになると少しずつ分かってくる

・昨年の集いテーマ「つくる　まもる　つなぐ　地域の伝統」を思い出した。公民館のつなぐ力というと人と人、団体と団体などを想起するが、公民館がある地域の伝統をつないでいくことも公民館のつなぐ力なのだと思った。

③家庭教育学級からサークルへの発表に関する分科会

■自己紹介

・デイサービスの看護師をしている。施設で読み聞かせを行っている。話を聞きたいと思いました。すごく活発な方だという印象を受けた。あまり子どものころは本に興味がなかったが、大人になってから、興味が湧いてきた。

・ろうそくなどの演出もよかった。やっている内容が子どもたちにもすごくいい。

・お話会のことを聞き、子どもの喜ぶ姿が目に浮かんだ。

・最近仕事が忙しくなって参加できなくなってきてしまったが、めんどりの会やブックママの活動をして、スクールボランティアで読み聞かせをやっている。年に１回か２回で読み聞かせを行っている。分科会の方で学ばせていただければと思っている。

・周南公民館の職員。雰囲気作りが上手かった。自分の頭で想像して、引き込まれて、何にも絵はないが、自分で想像して情景を思い浮かべることができるお話の仕方で印象に残った。

・中央公民館運営審議委員。あちこちの行事に顔を出している。先日も公民館研究大会があり参加した。町の中をたっぷりと歩き、今日も歩くので来るのをやめようかとも思ったが、来てよかった。自分ではなかなか歩く機会を持たないので良い機会だった。
君津における公民館の運営の仕方や事業がどのように行われているのか、非常に活発に行われていると思った。住民や職員で絆が培われていて、なかなか君津っていいなと思った。市域が広く山間部を知る機会がなかったが、公運審などの役について知る機会が増えた。齋藤さんの行っている活動を面白いなと。新しい一面が見えてよかった。

・上総公民館の連絡協議会の会長を長年やっているおかげで、地域に自然に知り合いが多くなった。もともと公民館のまちなみ塾という事業に参加したのがきっかけで、地元の人などとも交流があったが、今はよそ者が集まって５人で活動をしている。発表を聞いて活動の開始など似たところがある。会員の減少など同じ悩みがある。

・齋藤さん（発表を終えて）：自分はこうして様々な活動に参加して、やりたいことができてラッキーだと思っている。世の中にはいろんな力を持っているのに発揮できない人もいる。今は、共働きの家庭が多く専業主婦がいなくなってきた。中に入るので声をかけても、腰を上げて行動をしていくのは難しいなあと感じている。高齢の方々が元気な方が多く、私の会にも７０歳近くの方がいて、「やりたいことがあったら公民館に行く」そういうところを考えてもらえればと思う。

■公民館のつなぐ役割とは…

・公民館の職員が代わった時に、新しく来た人は融通が利かないとかいう話を聞く。それは自分が何を言いたいか、聞きたいかをはっきりと伝えていないという事だと思う。

・公民館の役割の問題かな。公民館の職員は市役所の職員、公民館というのは市民と直接通う窓口、本当は絆というのが役割だとすれば、役所の縦割りを壊すコーディネーターの役割ではないかと。いろいろなところから情報を仕入れて作り直すそういう役割なのかなと。市役所というものをフルに利用すれば、例えば、青葉高校などが市役所などと結びつけることもできる。

・かたつむりの会という活動を行っており、健康づくり課と関わりがあった。公民館が間に窓口になって、職員と別な市民が繋がり、広がりを作っていく。そういった中で公民館の機能が活性化していくのではないかということがあると思う。

■「何はともあれ、公民館」

・公民館の雰囲気を作っていくのは、公民館職員と住民、新しく来た職員はだんだんその館の雰囲気を感じながら成長していくもの。住民の方は職員を育ててあげてほしい。

・空間を濃くしていくのは、公民館職員の仕事かなと。そうじゃない部分は、住民が公民館を使うときに、雰囲気を作っていくもの。どちらも居て育ちあわなければ、雰囲気は作って行けない。

・公民館としては、これからこういうことをやっていかなければいけないかなと。公民館の職員の配置って、本当に適任者がいるかどうかは分からないので、その辺は、みなさんが教育をする。それくらいの気持ちで接していければと思う。公民館は何をするところというのをもう一度考えていかなければならない。

・公民館に来てみて良かったなと思えるように。その中でどういう風に利用するか、よい雰囲気を作っていくかというイメージが出てくると思う。

・まったく来ない人は公民館が何をしているのか分からない人が多い。

・今、話題になっている共働きの方に向けたもの。行事を夜にやれば来るのか。かたつむりの会などはみんなが集ってやるようになっているが・・・

・あまり関心のない人に向けて何かやっていたら行ってもいいかなと思える場所が公民館。

・私が公民館に関わり始めた最初のきっかけは子どもの注射などで公民館に行ったとき、職員の方が声をかけてくれたこと。それが、きっかけでいろいろな学習をするようになってきた。

・職員は、まったく公民館を知らない人たちに声をかけること。その人たちと顔見知りになることが大事なことかなと。小櫃公民館もここ１、２年で職員が随分変わってきた。みんながいろいろ考えていく時期だったかなと。副館長は、これまで、図書館や発掘関係で仕事を行ってきて、公民館って何だろうということを踏まえて、いろいろな公民館事業に関わり、最近では、その経験が十分に生かされていると感じている。公民館ってこういうことをやってきていいのかということを分かってきたんじゃないかな。

全体交流会

１．分科会についての報告

分科会① 小櫃公民館の取り組み【報告者：飯泉】

・この分科会には、小櫃地区に住んでいる人や小櫃小学校・保育園の関係者が多く参加していた。「おしゃべりウォーク」に参加した感想や、公民館との関わりについて日頃感じていることなどを話し合った

・“公民館のつなぐ力”について、公民館には職員の異動があるが、職員が異動しても組織として公民館運営をつないでほしい（公民館運営を継続して欲しい）という意見や、公民館職員や地域住民が、地域のことをつないで欲しいという意見が出た。

分科会② かやぶき屋根の葺き替えについて【報告者：會澤】

・この分科会では、「おしゃべりウォーク」の取り組みと茅葺屋根の茅替え作業の取り組みについて、１７名の参加者と話し合った。

・この２つの取り組みから、「人のつながり」「伝統をつないでいく」という点が公民館のつなぐ役割ではないか、という意見が出た。昔はムラの役割の１つであった“結”や相互扶助の役割に代わるものが、今後の公民館に期待されるのではないだろうか。

・公民館をさらに魅力あるものにしていくためには、まず公民館の魅力に気付いてもらったり、足を運んでもらったりといった仕掛けが必要であるが、まだまだ不十分である。色々な人に公民館に足を運んでもらうために、イベントを実施するなどのほかに、公民館側から届けていく仕掛けや、茅葺の作業のように、色々な人との関係を通して、縁の下の力持ちのような人を増やしていくことで、はじめて公民館の魅力や課題に気付くのではないか。

分科会③ 家庭教育学級からサークルへ【報告者：木曽野】

・この分科会では、「まほうのらんぷ」の報告から、お話会は話を聞く側の想像力を高めたり、子どもに限らず幅広い人に親しまれているといった感想が出た。

・盛り上がった話題は、「公民館の役割、つながり」というテーマ。公民館は地域の誰もが来て話をし、困ったことがあれば、例えば別セクションにつないだり、他の地域の人を紹介する所というイメージが出された。このイメージで、「何はともあれ公民館」というキャッチフレーズが出たが、これぞまさに公民館の仕事ではないかと思う。

・その際、公民館の職員がどんな役割を果たすかが大切になるが、職員は異動があるので、地域の人を知らないこともある。職員が変わっても、職員や公民館を育てることのできる地域住民がいることも、公民館を育てる力になるのではないだろうか。

２．全体意見交換

・公民館に足を運んでもらう仕掛けが必要という話題が出ていたが、今は高齢化も進む時代でなかなか公民館に足を運ぶことが難しい人もいる。公民館職員に頼るだけでなく、公民館で育った人が自分達で工夫し、何かしらの活動を地域に届けるという視点もあるのでは？そういった公民館を支える力を基にして、地域がさらに良くなっていくのではないかと思う。

・現在、「浜子の歴史と景観を守る会」の活動をしているが、一昨年度の「共に学ぶ市民の集い」で公民館と関わりを持ったことをきっかけに、今回の集いに参加した。こういった関わりも、公民館のつなぐ力の１つだと感じている。

参加者の声【アンケート集計結果】

アンケート提出者数：２７名／約６０名（内実行委員 25 名）

１　ご自身についてお答えください。

a　性別　男性１９名　　女性８名

b　年齢　２０代　０名　３０代　０名　４０代　６名　５０代　０名
　　６０代　４名　７０代１７名　８０代～０名

c　お住まいの地区　君津地区　７名　八重原地区　０名　周西地区　１名
　　周南地区　３名　小糸地区　６名　清和地区　４名
　　小櫃地区　４名　上総地区　１名　市外１名

d　職業　自営業　０名　農　業　２名　会社員　６名　主　婦　４名
　　学　生　０名　無　職１２名　その他　３名

e　これまで公民館活動への参加　有　２４名　無　２名　無回答１名

２　本日の「集い」はどちらで知りましたか？　（複数回答）

公民館２０名（中央４　周西４　周南１　小糸４　清和３　小櫃４　他１）
広報きみつ２名　自治会回覧３名　知り合いから５名　その他３名
房総ファミリア・ホームページ０名

３　この「集い」に参加しようと思ったのは、どのような理由からですか？

・地元での開催であったため。
・小櫃地区の住民パワーって何だろうかを知るため。
・前回も参加したので。
・ウォーキングがあったから。
・ウォーキングに参加したかった。
・各地域の活動を知り見識を深めたい。
・知人に誘われ、又７ｋｍならば歩けると思い参加しました。
・清和地区に住み同じ君津市にすみながら小櫃をまったく知らず、おしゃべりウォークを通して何か得るものを思い参加しました。
・小糸地区以外の公民館活動を学びに。
・小櫃公民館の取組みを知りたかった。
・どんな活動をされているのかとはじめての参加です。
・他の公民館の活動状況を知りたかった。
・友人の紹介。
・公民館職員からの勧誘。

・この地域のことを知りたいと思ったから
・誘われました。
・小櫃公民館から声をかけていただきました。
・実行委員として。どんなことになろうと、メンバーが楽しいからです。
・参加を呼びかけられたから。
・ウォーキングがあったから。
・常日頃から公民館行事に参加しているから。

４　参加していかがでしたか？

・大変有意義な一日でした。
・とても歴史のある町づくり、人づくりを地道にやっている感じを得ることができた。
・天候にめぐまれてよかったです。
・初めて歩いたところだったので良かった。
・天気が良くて運動ができて良かったです。
・職場である周西公民館との違いに悩み、考えが深まった。
・今後とも地域と関わりを持ち続けたいと思う。
・楽しかった。
・小櫃公民館の活動をより深く知ることが出来た。
・最後の登りはきつかった。元気なうちに登るほうがよかったのでは。
・かやぶき屋根の葺き替え。ていねいな説明でよく判った。
・天候も最高。３つのお話も大変良いお話で参加してよかったと思いました。
・コースの説明は途中聞いたのだが、歩いたのち再度地図上で聞きたかった。
・参加してよかった。特に気付いたことは、農道に犬のフンや空き缶が１つもなかったこと、小学校のグラウンド（特にトラック部）に草が無く手入れがとても良かったこと。
・晩秋の気持ちの良い一日。楽しい集いでした。
・各地区の公民館職員と代表者の方々の努力されていることが感じられた。
・大変良い体験をいたしました。
・良かった。多くの方の意見が聞けて参考になりました。
・公民館の運営についての話し合いができてよかった。
・非常に健康に良い。
・大変意義深い１日でした。
・様々な想いを持って活動されている方々のお話をうかがって大変勉強になりました。
・足が少し痛い。お弁当うまい（なので、少し眠くなった）。分科会は短く感じた。
・勉強させていただきました。
・良かった
・とても天気に恵まれて楽しいひとときを過ごさせていただきました。

５　今後とりあげて欲しいテーマはありますか？

・地域の文化をつなげて欲しい。
・今後とも、１人でも多くの方の公民館への理解と参加下さる様な内容。今現在のまた今後に役立つ内容を検討し、公の機関ならではの内容をお願いします。
・健康
・公民館活動と密接に関係のあるテーマについて議論する機会をつくること。例えば成人の教育についてこれからどうするのか。
・小櫃地区のことについて。
・どちらかというと、「市街地」の様子の実際を知りたいような気がしています。

６　その他、「共に学ぶ市民の集い」についてご意見があればお聞かせください。

・公民館は単なる地域と人をつなぐ役だけでなく、様々なイベントに積極的に足を運び、意見交換を密に行うことではないかと思う。又、市の責任として、職員の人事のあり方（２年交代よくない)、イベントに伴う財政支援を積極的に考えて欲しいと思う。
・お天気も良く楽しい１日だった。知らない人との会話もよかった。来年も是非参加したい。
・おしゃべりウォークについて：今回の他にもコースがあるのか。参加者は小学生が多いのか。参加人数は何人くらいか？
・何回か参加していますが、参加すればその地域の特殊性もわかり非常に参考になる事を実感しています。もっと若い人が参加しやすい内容を選んでほしい。
・公民館の制度は世界でも類を見ないものなので、これを有効活用して、日本の文化・伝統を受け継いでいく役割を進展させるための努力が必要と思われる。このための企画をこれからもお願いしたい。
・勉強になり、ありがとうございました。
・君津地方は公民館がまだ指定管理になっていない地域です。だからこそ、本来の意味での生涯学習の拠点としての活動ができる場所であると思います。今の時代「子ども」がキーワードになりがちですが、市民の方々ご自身の生きがい作りのために人と人とのつながりを提供する場であってほしいと考えます。
・参加者が今でもあまり多くないけれど、課題でもあると思っていますが、今後も続けてほしい。
・本日のようなイベントが各地区で１回／年　開催されると良いですね。

全体総括～公民館の「つなぐ」力～

公民館には「つどう」「まなぶ」「つなぐ」など様々な役割がある。今回の「共に学ぶ市民の集い」（以下、「集い」）は、多様にある公民館の役割の中でも「つなぐ」に焦点をあて、公民館の力の可能性について深める取り組みとして実施した。

１．４つの「つなぐ」

今回の「集い」実施に向け「人と地域（団体）」「人と人」「団体と団体」の３つの「つなぐ」が公民館にあるのではと考え、実行委員会内で情報交換を交えつつ議論を深めた。

「人と地域（団体）のつながり」では、その取り組みとして、学級講座などの主催事業を通して個人が地域と関わりを持つ機会となっていることが挙げられる。特に新しく引っ越してきた人などが地域を知ったり地域活動に関わるきっかけとなることが期待される。また、今回のかやぶき屋根についての報告や各公民館で実施されている利用者合同の環境整備作業にも見られるように、多くの人が１つの目的に向かって体を動かすような共同作業に取り組むことも有効であろう。さらに、地域の情報を掲載している館報（公民館だより）の発行も人と地域をつなぐ役割を持っているといえる。

「人と人のつながり」については、公民館の役割として、まずは仲間づくりが挙げられる。「まほうのランプ」の報告にもあったように、主催事業の中やその後のサークル活動への後押し、そしてサークル活動の支援などにその機能が見られる。さらに公民館には、地域の人材と住民との結節点・接着剤としての役割がある。地域の人を公民館が知らなければ、人と人とのつながりをつくることはできない。公民館には、公民館に来ている人についての情報と、あわせて地域に出て行って人材を発掘することの両方が必要とされている。どれだけ地域の人を知っているかは、公民館がその機能を果たすことができるかのバロメーターの１つとも言えるであろう。

そして、「団体と団体のつながり」についてである。当日はこの「団体と団体のつながり」の実例として小櫃地区で毎年実施している「おしゃべりウォーク」に参加し、小櫃地区の体育関係団体のつながりとそこに関わる公民館の姿に触れた。その他、小櫃地区から紹介された「子ども会等関係者会議」や各地で取り組まれている青少年健全育成活動との公民館の関わりもこの事例として挙げられる。各公民館で行われているサークル同士の交流事業や文化祭などもこの「団体と団体のつながり」という視点で取り組まれることが期待される。また、昨今、少子高齢化や人間関係作りの意識変化などの影響から、各種の地域団体の力が弱まっているとの声も聞かれる中で、公民館が団体と団体とをつなぎ合わせ、活動の援助をすることも求められている。

さらに、今回の「集い」を通してもう１つ確認された公民館の「つなぐ」は「時代をつなぐ」であった。地域の伝統や文化を過去から現在にそして未来につないでいくことも、公民館に求められている役割といえる。これは、第５回「集い」（テーマ：地域の歴史（あゆみ）を学び、伝え、活かす）、第６回「集い」（テーマ：まもる　つくる　つなぐ　地域の伝統）で報告・議論されてきたことにも通じるものである。

２.「つなぐ」のために公民館に必要なこと

さて、これらの「つなぐ」の役割を発揮するために公民館に必要なことを今回の「集い」での議論をもとに整理すると、以下の５点にまとめられる。

（１）職員の姿勢

「つなぐ」ためには、公民館職員が地域住民と人間関係を構築していくことがその出発点となる。地域とともに歩む公民館であることを常に意識し、地域の声に耳を大きくしながら、腹を割った人間関係づくりをしていくことが職員には求められている。また同時に、職員自身が公民館職員としての力量を高めていかなければならない。そのためにも研修の場が重要となる。この「集い」も職員にとって大切な研修の場とも言えよう。

（２）公民館が組織体として取り組む

公民館には職員の異動がある。「つなぐ」は、職員の人間関係に依るところが大きいことは事実ではあるが、職員の異動によりその役割が機能しなくなるようでは問題がある。職員が異動しても公民館が地域での「つなぐ」役割を継続できるよう、公民館が組織体としてその方向性を維持するような取り組みが必要とされている。

（３）仕掛け

「つなぐ」ためにどんな仕掛けができるかという視点も重要である。公民館の取り組みには、継続性と仕掛けのバランスが必要であるが、現状では、継続性に重点が置かれているのではないかと言う指摘もあった。対応力や柔軟性を備え、必要なタイミングで仕掛けることができる“攻めの姿勢”を持ち合わせているような公民館運営（事業構造）が求められる。

（４）情報収集と調整

地域の情報を把握していなければ、「つなぐ」ことはできない。公民館には人材や団体、行事などの地域情報をつかんでほしいという声が挙げられた。「とりあえず聞けばわかる公民館」「なにはともあれ公民館」というフレーズが議論の中で出されたが、これに集約されるように情報収集についての公民館への期待が高い。

また、地域の調整機能も公民館に求められている。地域内の各種団体の活動や行事などを公民館が間に入って調整することや、地域での課題についての相談があったときに別セクションや他団体につないだり他の地域の人を紹介したりすること等がその具体例である。公民館が調整に入るからこそ、地域の目指す方向性(目的や課題)が明確化していくのではないかとの指摘もあった。

（５）雰囲気づくり

「つなぐ」ためにも、誰にでも開かれた雰囲気での公民館運営が望まれている。まずは、「来て良かった」と思われるような職員の明るく協力的な対応が必須条件となる。その上で、例えば公民館のロビー空間を「地域のロビー」「みんなの茶の間」にデザインするなど、普段公民館を利用していない人でも入りやすい雰囲気、話しやすい雰囲気を感じてもらえるような空間作りが求められる。公民館をさらに魅力あるものにしていくためには、まずは多くの方に公民館へ足を運んでもらい、公民館の魅力に気付いてもらえるような取り組みが必要である。

３．公民館の「つなぐ」力

「集い」終了後の実行委員会の振り返りの中で、小櫃地区の「成人を祝う集い」（いわゆる成人式行事）における今年の取り組みが紹介された。公民館から地域に投げかけたことが波紋のように広がり、餅つきの手配、お茶出し、手作りお菓子の提供など、地域からの大きな協力を受け、地域でのお祝いという雰囲気としての成人を祝う集いが実施されたとのことであった。これらは、小櫃公民館のこれまでの「つなぐ」が形となって表れた一例であろう。

また、公民館と学校のつながりについての議論もなされた。学社連携・融合などの言葉が聞かれるようになって久しいが、まだまだ敷居が高い現状にある。連携や融合という形にこだわるのではなく、素朴に「つながる」こと、つまり日常的な関係性を持つことが、地域教育力の向上に資するのではないだろうか。例えば、学校職員と公民館職員の対話の場を設ける、小中学校の行事調整の会議の場に公民館も入るなどの方法もあるだろう。今回見てきたような公民館の「つなぐ」力を発揮し、公民館自らと学校とのつながりをつくることが、今後学校再編が進む君津市の地域教育において公民館と学校、それぞれの可能性を広げていくのではないだろうか。

さて、公民館が「つなぐ」力を発揮するためには、職員の姿勢に依るところが大きい。地域住民との人間関係づくりを大切にし、地域内での調整役や連絡役として機能する、地域内の情報を把握・整理し発信する、というような自覚が職員には常に求められる。例えば、実際に汗をかいて住民と共に活動するような、日常的で地道だが着実な関係性づくりが重要であろう。

それと同時に今回の「集い」では、公民館職員に頼るばかりでなく、公民館で育った人が自分達で工夫し何かしらの活動を地域に届けること、また、それにより公民館を支える力となることで地域がさらに良くなっていくのではないかという指摘もあった。

現代における公民館の存在意義を考える上で、「つなぐ」という役割はあらためて重要であるといえる。少子高齢化が急速に進み、かつて生活の中に当然のようにあったであろう地域のつながり・協力の姿は見えにくくなり、「人間関係の希薄化」「無縁社会」と危惧されるようになった。このような現状に直面し、今の公民館には、昔はムラの役割の１つであった“結（ゆい）”や相互扶助の役割に代わるものが期待されており、そして、まさにそれが「つなぐ」だと言えよう。これから地域が抱える様々な課題に向き合っていくためにも、縁を結び直し、地域の団体が連携し一丸となって取り組んでいく必要がある。同時に地域課題を「つなぐ」という視点で見直してみることも必要であろう。これらの結び役として公民館がつながりづくりを仕掛けていくことが重要である。また、そのためには、公民館が各地域に配置され、人間関係を蓄積していくことで、はじめて円滑に機能していくことも、今回の「集い」の報告事例や議論からあらためて確認できた。

今回のテーマとした「つなぐ」も含めて、公民館の役割にはこれから一層期待が寄せられると言えよう。そして、多様な公民館の役割は公民館が持つ総合的機能（集う、学ぶ、つなぐ、集め伝える…）があるからこそ発揮されていることも認識していかなければならない。

市民と職員が共に集い語り合ったことでこれらのことが確認された今回の「集い」であった。

あとがき―実行委員の想い―

■君津中央公民館

今回、久しぶりの発表も行いましたが、時間超過により一番大事な分科会の時間が短くなってしまい大反省です。何より良かったのは、準備や実施後に実行委員の意見交換の時間を多く持てたことです。そして、「集い」は参加者からの声を集める場所と明確にしたことにより、運営もやりやすかったと思います。君津市も経営改革で大きく変化していく中、公民館のあり方を議論し続け、視野を広げ、より良い地域を作るために、豊かな人生を送るために、一緒に学んでいけるこの場がとても大切だと強く思いました。 **― 齋藤みどり**

今回、初めての「集い」参加となりました。

小櫃地区の活発な活動に、感銘を受けました。特に個の力、思いを団体や組織の力に変えていく姿はとても参考になりました。

次年度は当館の担当なので、今年の例を参考に、実行委員の皆さんと相談しながら、個々の思いを生かした、よりよい「集い」になるよう頑張っていきたいと思います。**―小林太郎（職員）**

■八重原公民館

「連携（つながり）はいきもの」今回の「集い」で、ことに心に強く刻み込まれたのは、小櫃公民館副館長藤平さんが報告の中で語られたこの言葉でした。おしゃべりウォークの歴史や成人の集いの準備で示された小櫃地域の人達のつながりの強さの源はきっと、この地域の人達が守り育んできた、「小櫃の子供をみんなで育てよう」という大人たちの、粘り強い連携活動の歴史なのでしょう。

連携の形を作るのは簡単。でもそれが生命を永らえ、目的に達するには、携わった人達の、あるいはそれを受け継ぐ人達の、意志と心のつながりと粘り強さと、そして何よりも愛であるのだと、教えられました。 **― 山田周治**

まだ誰も経験したことのない、「人口減少」の時代。施設再編の波が公民館にも打ち寄せている今、あらためて公民館の「つなぐ」という機能に焦点を当てた今回の「集い」。問われていたのは公民館の存在意義という表面ではなく、地域の課題に向き合う地域の底力にどれだけ公民館が応援してきたかであったように感じる。地域のヨコのつながりを編んでいくと共に、過去・現在・未来という世代間のタテのつながりにも、公民館が果たす役割と責任は大きい。地方の活性化に「何はともあれ公民館」と思ってもらえるような公民館職員でありたい。

― 會澤直也（職員）

■周西公民館

初めて参加した「おしゃべりウォーク」はとても楽しかった。地元小櫃の小中学生はとても純真で、親御さんを含め、地元の催しに参加する意識がとても高いことに感心した。

このような意識は、地元の学識経験者とのコミュニケーションの多さから生まれたものではないかと思う。地元住民と公民館が今後も発展するためには、「おしゃべりウォーク」はすばらしい手段だと思う。他の地域でも取り組んでいくとよいのではないか。 **― 壁屋元生**

今回の「集い」では、会場館の小櫃からの「旅行的なものではなく、公民館が地域をつなぐ調整役を担っていることについて考えたい」という提案から始まった。ここ数回の「集い」は、観光的な要素が前面に出ていた。今回は、各地区から事例を持ち寄り、ひとつの切り口から見つめなおし、成果と課題を各地区に持ち帰るという、「集い」の原点に立ち戻ることができたと思う。この「集い」から、公民館のつなぐ力がより一層見直され、充実していくことを期待したい。

— 今井雄生（職員）

■周南公民館

各公民館を巡る市民の集いも回を重ね５館目、小櫃にて開催された。今回はバスの送迎も無いのによく三十数名の一般参加があったと思う。一般市民に少しは知られてきたのか？だがアンケートを見てみると、まだハイキング感覚の人が多いようだ。

おしゃべりウォークで人と人とのつながりができた人もいた様だ。分科会でもそれぞれ意見交換が活発に行われた様だった。アンケートで来年も参加したいと答えた人が数名いたのは大変うれしい事だ。「つなぐ」とは自然体でつながってゆくのではないか。

— 髙橋榮一

公民館で出逢い様々な方と交流を深めること。それは私にとって各ジャンルの専門書を何冊も一生懸命に読むよりも、更に詳しい知識を楽しみながら得られる大切な時間です。それを改めて実感することができた「集い」でした。実行委員・職員・地域でご活躍の参加者の皆さんそれぞれの想いや、これまでの経験に基づく構想力と分析力、又、それを体現する実行力。傍で拝見し、ご意見を聴くたび伝わってきました。周南の茅葺き作業での貴重な体験をお伝えできたことも幸いでした。今後も「集い」と会議で皆様のお力を学んでいきたいと思います。

— 黒澤美英子

今回、初めてこの「集い」に参画しました。会議を重ねる度に、意図する課題が具現し、少しずつ理解を深めていくことができました。

地域に息づく活動事例の数々から、人と人のとりもつ味、伝承されつつ根付いていく歴史文化の味、その土地ならではの社会性の味等々体感し、学びが多かったことに感謝します。

今後、この「集い」の味の幅を広げるには、気易く人と人の近い距離にある公民館が、より一層コミュニケーションチャンスをつくり、市民と共育・共存のカラーをもりこまれていってはいかがかと思いました。

— 小田部康伊

全国的に公民館の有り様が改めて問われている。そんな中、いつも自問するのは、公民館は、地域の、住民の役に立っているかということだ。

公民館が役立つものである為には「つなぐ」は不可欠だ。そして「つなぐ」は職員の想いだけでその機能を発揮させることができる。なぜなら「つなぐ」の基盤は人間関係だからだ。この「つなぐ」こそ、公民館と地域の新たな可能性を見出すのではないか。

こんなことを強く認識した今回の「集い」であった。事務局として携わった今回の「集い」で、私も多くの「つなぐ」をいただいた。感謝したい。

— 中村亮彦（職員）

「おしゃべりウォーク」は、小櫃地区ならではの取り組みで、地域の輪が広がる素晴らしい催しでした。それに続く３本の報告、そして分科会・全体討議と貴重な意見を頂くとともに、参加者のみなさんにとっても有意義な時間にできたのではないかと思います。

この「集い」は、公民館のあり方について、市民と職員が共に語り、その成果を今後の公民館事業につなげていこうという取り組みです。小櫃で今回得られた成果を、今後は各公民館運営につなげたいと感じています。

小櫃地区の関係者をはじめ、実行委員のおかげで無事に開催することができました。各関係者のみなさまに心より感謝申しあげます。 **― 岸　良宏（市公連会長）**

■小糸公民館

天気に恵まれ、みんなとおしゃべりしながらウォーキングは良かった。普段は小櫃公民館へ車で出向いて来ます。今回は農道、国道をウォーク、平坦な道から急坂を上って小学校、裏山の教育の森を散策、地元の方の説明を聴きながら、広げる　人の和　地域の輪　公民館のつなぐ力の「集い」でした。 **― 北原澄子**

共に学ぶ市民の集いでは、若い職員さんから、地域の有識者の方々と交流を持たせて頂き、色々な意見を伺ったり、一緒に活動させて頂く事で各地区の知らなかった面が少しずつ見えて来たような気がします。地域の特徴を全面に出し、素晴らしい物がこんなにあるんだよと一生懸命アピールしていました。各団体の方々も協力し盛り上げてくださって、一人の力は小さなものでも皆がつながれば大きな力になる！！それをつなぐパイプ役に公民館がなっていると感じました。 **― 千頭井久子**

今回の「集い」の報告と分科会、そして一連の実行委員会の議論を通して、今、公民館には人、組織、文化、歴史と様々なものをつなぐ機能とそれらを発掘し、蓄積していく力が求められていると感じました。今までわりと当たり前のように「つなぐ」という言葉を使っていましたが、改めて考えてみると随分と深い意味が込められていると気付きました。職員として、「つなぐ」ための仕掛けと動きをどのように作り上げていけばよいのか、自分自身の宿題として考えていきたいと思います。 **― 飯泉みゆき（職員）**

■清和公民館

今回の事業、他人ごとではなく、真摯に向き合い、純粋な気持ちに習わずにはいられない。今回も充実した中で終わったが、無縁社会に加え、殺伐とした社会、自分さえよければという風習、この言葉が浮き彫りになってくるこの様な時代において、今回のこの事業、誠に意のあることであり、更に幅広い地域に発信すべき事業だと思う。それには、この共に学ぶ市民の集いが、もっともっと多くの人が仲間となり、共に知恵を出し合い、前進していくことが、更により良い方向性が見出されることだと思う。ともあれ、小櫃公民館そして発表してくださった方々のご苦労に感謝を申しあげたい。 **―　青木　馨**

集いが７回を終え、あらためて「共に学ぶ市民の集い」の成果を考えてみた。７回を数える中で、たくさんの市民の参加を得たが、本当に学んできたのは実行委員そのものではなかったのだろうか。「集い」開催公民館の地域特性と人を知り、「集い」当日を迎えるまでに辿った道筋が何とも味のある学びだった。小櫃もまさにその通りだった。昭和３２年の分村危機にも小櫃をかたくなに守った小櫃魂を垣間見た。「集い」も８回からは都市部の公民館に会場が移る。どのような出会いの学びが出来るか今から楽しみだ。 **― 木曽野正勝**

第７回小櫃公民館での「集い」は、「語ろう　知ろう　公民館のつなぐ力」をテーマに実施された。おしゃべりウォークに始まり、３つの公民館・地域活動報告から、まさにテーマに基づく地域をつなぐ公民館の底力を教えられ、学ぶ事のできた素晴らしい内容に感銘を受けた。また各分科会の参加者の言葉にも力のこもった内容とお見受けした。この各地域の公民館が取り組む素晴らしい活動に、もっともっと一人でも多くの人に関心を持って臨んでもらい、回を重ねて実施していることに痛感し、特に若者の一人でも多い参加を呼ぶ魅力あるテーマとは何だろうと考える一人である。 **― 澤田君子**

「つなぐ」という言葉がキーワードになった今回の「集い」。当日発表された３本の報告を聞いて感じたことは、公民館と住民が今日までつながってこられたのは、これまでの積み重ねがあるからということ。そして、自然につながっていくのではなく、“何かの仕掛け”があって「つながり」が生まれるということ。この“何かの仕掛け”を作ることができるのは、「何はともあれ公民館！」であるよう、ひとりの公民館職員として仕事に向き合っていきたいと思いました。

―　徳重由華（職員）

■小櫃公民館

市民の集いを終えて

会場館の実行委員として、とにかくお天気に恵まれた事、参加者に事故がなく無事に終えられた事が良かったと思いました。

そして今回は今まで以上に話し合いを重ね原点に戻って考える事ができ、とても良かったと思いました。君津市に公民館ができて４０～５０年が経ち、時代の流れや、市民の生活や考え方が変化するなかで、改めてその在り方を変えていかなくてはいけないと思いました。

けっして“ゆとり”のある時代ではありませんが、職員の方と地域の人々が協力して、より豊かな活気ある場所になる様に考えるきっかけを作っていきたいと思いました。**― 小沢行恵**

今回は地元小櫃での開催とあってとても楽しみでした。

今までも地域やその中での人の繋がりは大切だと思っていましたが、公民館で行われるいろいろな行事やイベント、サークルに参加することで人生を豊かにするだけでなく、そこでできる『繋がり』が新たな繋がりを生み、そこからお互いの助け合いや支えあうことにも繋がっていくのだと感じました。公民館という社会教育の場が人と人、また人や団体、団体と団体をつなぐ役割を果たしていることを改めて認識できる機会になりました。 **― 宮崎良江**

終わってホッと･･･

あれやこれやの紆余曲折があって、ジブンが発表の当時者になった時は、正直戸惑いの方が勝って「ひえ～」という心境でした。公民館に携わってまだ１年とちょっと、まだまだ経験不足、ペーペーのジブンなんかがシタリ顔で発表･･･？、いやあ百年、とは言わないまでも、４～５年は早いんじゃないの、と。それでも発表に向けて、小櫃公民館に着任して自身が感じたことや、これまで公民館が実践してきたこと、或いはこれからやっていきたいことを館内で話し合ったり自問するうちに、今回の発表は小櫃のいいところを外に向かって発信できるまたとないチャンスだ、と前向きに考えられるようになりました。ぐずぐずになりそうなジブンを叱咤激励してくださった先輩方や職員の皆様には感謝、感謝。当日はまた見事な青空！。神様はいるんだ、と実感しました（笑）。 **― 藤平裕子（職員）**

会場館として役割を終えて・・・

小櫃公民館が会場館として、なんとか役目を果たすことができたのは、実行委員一人一人の献身的な活動の賜と感謝しています。

実行委員会を重ねるたびに公民館の在り方、あるべき姿について、考えることができました。今まで学校教育のことしか考えることがありませんでしたが、社会教育について、特に公民館で行われている社会教育について、市民の方々の話を聞くことにより深く考えることができました。

共に学ぶ市民の集いは、実行委員会の取り組み自体が、社会教育、公民館の在り方について深く考える場であると感じました。 **― 加藤洋和（会場館館長）**

■上総公民館

試行錯誤を繰り返す「集い」です。私自身は単純に楽しんでいるだけでありますが、すでに「何か」が生まれている気配が致します。今後は、もっと多くの人に声を掛けることを心掛けたい。市内８公民館を一廻りした後、自分なりの結論を持ちたいと思っております。 **― 白熊 大**

昨年度に引き続き実行委員として２回目の参加をさせていただきました。今回は昨年の経験もあり、本番に向けた流れも理解することができ、また準備をすることができたように思います。しかし、今回のテーマが「語ろう 知ろう 公民館のつなぐ力」であることからすると会場が小櫃公民館であったにも関わらず、上総地区からの参加が少なかったのは残念であり、つなぐ力が自分には足りなかったと感じました。この「集い」で得た「公民館のつなぐ力」を自分の力につなげられればと思います。**― 永田 聡（職員）**

【資料】　　「共に学ぶ市民の集い」について

１　これまでの「共に学ぶ市民の集い」

平成 19 年度　「明日の公民館を考える集い～本音で語ろう公民館のこと～」

＊「共に学ぶ市民の集い」の前身となる「ギャラリー・トーク」を第１３回　生涯学習フェスティバルにて実施

○内容　・発表　君津中央公民館（家庭教育学級）　周西公民館（福祉研究会）
八重原公民館（自然と人間を守る会/小櫃川の水を守る会）
小糸公民館（野の花を生ける会）　小櫃公民館（めんどりの会）

平成 21 年度　第１回

＊第１５回　生涯学習フェスティバルにて実施

○内容　・発表　①清和地区「炭焼きを後世に伝える―半兵衛炭の会―」
②周西地区「周西地区コミュニティバスその後―福祉研究会―」
③小糸地区「小糸少年すもう大会―小糸地区青少年健全育成連絡協議会―」
④久留里地区「久留里まちなみ塾のとりくみ　―まちなみ塾」
・グル―プ交流　・全体会

平成 22 年度　第２回

＊第１６回　生涯学習フェスティバルにて実施

○内容　・発表　①君津地区「歌でつなぐまちづくりーうたごえ喫茶「ふるさと」の活動」
②周南地区「地域の歴史と文化を探る―『すなみ巨樹・古木・名木マップ』を活用した事業―」
③八重原地区「自然とふれあう子どもたちー八重原地区青少年相談員連絡協議会と公民館の共催事業―」
④小櫃地区「地域全体で体力づくりースポーツの普及と地域の連携―」
・グル―プ交流　・全体会

平成 23 年度　第３回　　「久留里のまちを味わう１日」

○平成２４年２月４日（土）　１１時～１５時４５分　　○会場　上総公民館

○内容　上総公民館の「まちなみ塾」が行っている久留里のまちづくりの様子を、現地を訪れ、実際に活動している職員や市民の思いを聞く。（ホンモロコ養殖場見学・久留里の街並み見学・久留里寄席鑑賞・発表「まちなみ塾・その後」・交流）

平成 24 年度　第４回　「あなたの、私の、地域の、子どもの未来を考える１日～子ども、キラキラしてますか～」

○平成２４年１０月１３日（土）　１０時～１５時３０分　　○会場　小糸公民館

○内容　こどもの未来を考える取り組みから学ぶ

・小糸少年相撲大会見学

・発表・交流　①小糸地区「小糸少年相撲大会の取り組みについて」
②清和地区「秋元小通学合宿」　③八重原地区「自然体験活動とオトナの関わり」

平成 25 年度　第５回　「地域の歴史（あゆみ）を学び、伝え、活かす」

○平成２５年１２月７日（土）　９時３０分～１６時　　○会場　周南公民館

○内容　地域の歴史を「伝える」こと、地域づくりや生活に「活かす」ことは容易ではない。周南地区で実際に地域の歴史文化に触れながらその実践を体感し、テーマについて議論した。

・建暦寺（浜子）、西了寺（小山野）、禅定院（小山野）見学

・発表・交流　①「浜子の歴史と景観を守る会について」（活動開始の経緯とその活動内容）
②周南公民館「ふるさと運動」（特に歴史・文化）紹介

平成26年度　第６回　「まもる つくる つなぐ 地域の伝統～清和でふれあう ふるさとの今昔～」

○平成２６年９月２７日（土）　１０：００～１６：００

○会場　清和地区（三島神社・清和中学校・宿原青年館）

○内容　伝統文化には様々なものがあり、後世とのつながりを作ったり、地域の魅力の一つになったりするなど、地域の宝となっているが、高齢化や子どもの減少によって、後世に伝えることが難しくなっている。地域の伝統文化を後世に伝える意義について学び、参加者がそれぞれの地域で取り組めることについて考えを深めた。

・三島神社社殿の解説・見学

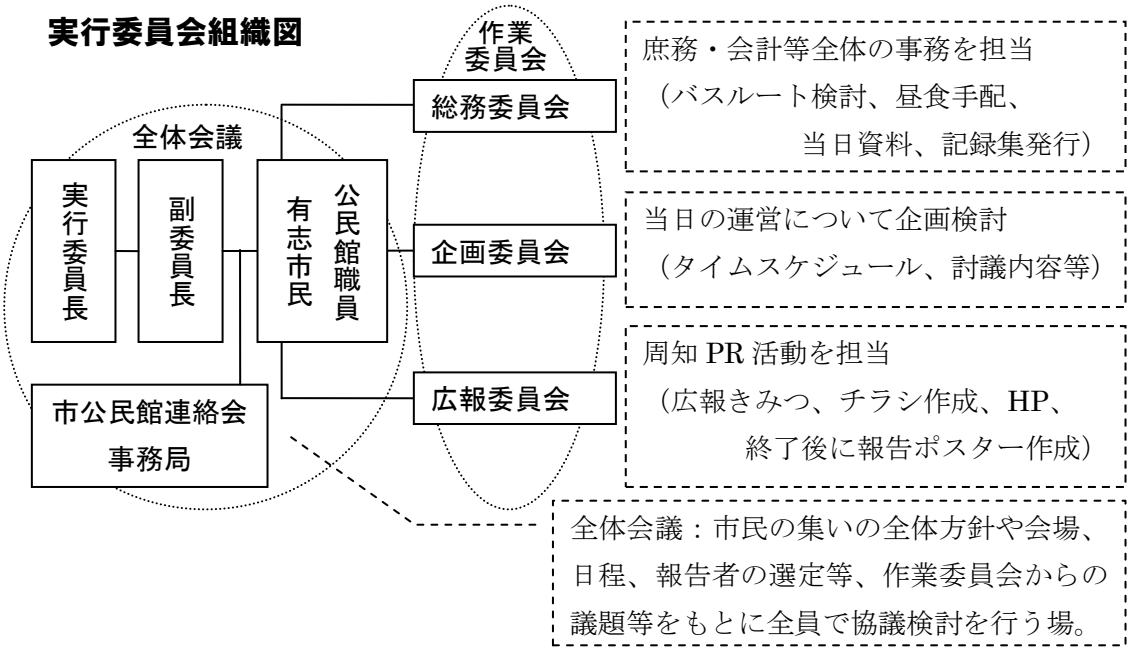
・講演「まもる つくる つなぐ 地域の伝統」（県立中央博物館 島立理子 氏）

・発表①「清和学」（清和中 生徒３名）②「ぽぷら文庫」　　・全体討議

・棒術練習風景見学・インタビュー（宿原区棒術保存会）

２　共に学ぶ市民の集い実行委員会について

「共に学ぶ市民の集い実行委員会」は、公民館で活動する有志市民と、君津市内の公民館で組織する君津市公民館連絡会で構成されています。



平成２７年度
第７回「共に学ぶ市民の集い」記録集

■発行日　平成２８年２月
■編集・発行　共に学ぶ市民の集い実行委員会
事務局　周南公民館
（TEL　0439-52-4915）